
HARU と SORA

ぱーちん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HARU と SORA

【Nコード】

N6381X

【作者名】

ぱーちん

【あらすじ】

私（堤）は外資系メーカーに勤めて22年．．．今は国内の事業部長をやっている。仕事は順調で充実していたが．．．家庭は崩壊寸前だった。それでも家族を守るため家庭での孤独を耐えていた。2011年が明けたある日．．．自分のデスクから10mほど先に見知らぬ女性が座っているに気づく。それが柴咲亜美との最初の出会いだった．．．

出会いとfacebook

2011年1月8日土曜日、私は昨年末からのクレーム処理で休日出勤を余儀なくされていた。

(正直言って．．．家にいるよりも気が楽だったりするのだが．．．)

デスクでクライアントへのレポートを作成していると10mほど先に見知らぬ女性が座っているのが見える．．．

一瞬彼女の視線がこちらに向いて目が合う．．．

(誰?どこかで．．．逢った?)すぐにPC画面に視線を落とす。

少し気になったがレポート作成に集中する．．．1時間ほど経つただろうか．．．気づいたら彼女の姿は消えていた。

またいつもの月曜日．．．スターバックスでコーヒーとBLT&エッグを注文する．．．

「テイクアウトで．．．」堤さん おはようございます!」「おはよう．．．」

(こんな生活も7年目．．．か)店長とも5年以上の長い付き合いだった。

デスクで買ってきたコーヒを飲んでオフィスに視線を向けると10m先に土曜日の彼女が座っていた。

PC 画面を見ながら淡々と仕事をしているのが見える 内線が鳴る．．．

「堤部長 ミーティング 時間です．．．」

「ああ．．．すぐに行く」ミーティングルームへ急いで向かう。

デスクへ戻る途中 同僚に彼女のことを聞く．．．コンプライアンス部門に入社した派遣社員らし

かった。ミーティングが終わってデスクに戻る・・・彼女の方に目を向ける・・・PC画面を凝視している

(あっ・・・)一瞬目が合う

(なぜだろう？彼女のことが・・・いや・・・きつと気のせいだ・・・)

次のミーティングの準備をする・・・(ああ・・・今週は3つも新年会が入っている・・・)

月曜日・・・(あとどの位こんな月曜日が来るのだろう・・・)いつものようにテイクアウトした

コーヒーをデスクへ持ち込む・・・突然後ろから声がする

「スタバ良く行くんですか？」

「えっ・・・」10m 先にいるはずの彼女が突然 声を掛けてきた・・・動揺する。

「月曜日は・・・いつも」彼女の問いかけにやっと答える・・・

「今朝 お店で お見かけしたので・・・失礼します・・・」そう言っただけ彼女は自分の席に戻って行った。

彼女に見透かされてようで・・・でも 意識しないようにすればするほどなぜか・・・動揺してしまう。

彼女にそれを悟られてはいないか？でも・・・どこかで逢った？もうひとりの自分が彼女に関わるな

と強く自制する・・・(なに どうしたんだ？・・・なにやってんだ・・・)

私は月曜日と特別なミーティングがある日以外ほとんど社内にはいなかった。

そしてまたいつも通り退屈な 月曜日がやってくる・・・その繰り返し 朝のミーティングからデスク

に戻る彼女が忙しそうに動き回っている光景が目に入る。そんな時不意に彼女が近づいて来て

資料を渡される・・・「ありがとう」またしても動揺を隠せない。

「お子さんの写真ですか？」彼女がデスクにあるフォトフレームを見て言った・・・

「ああ・・・」明らかに動揺していた。

「可愛いですね　　〽お幾つですか？」自然に振舞おうと努力するが声が上がらず

「高校1年と小学6年・・・」

「私も・・・」

そう言いかけて彼女は話すのを　やめた・・・

「失礼します・・・」

彼女は自分のデスクに戻って行った。　（私も？　・・・　彼女に

も子供が・・・？別にいても・・・

おかしくないが・・・）

彼女への好奇心が私の中に広がっていく・・・　デスクに戻った彼女に目を向ける

（年は・・・　35歳くらい・・・かな・・・　髪は肩くらいまで伸びて・・・）自慢じゃないが今まで女性の年齢など当たった例などない・・・

（なぜだろう？・・・10　m先の彼女に勝手に・・・目が向いてしまう・・・）

そんな気持ちを振り払うように1階に降りる「何かあったら携帯に連絡を！」

「了解です・・・」アシスタントの天谷が応える。

社内では部長職・・・　ここ数年は仕事も順調で結果も残してきたが　生きている充実感はいくつ

失われていく。

社内で心を許せる人間はたったひとり・・・　家庭では数年前から孤立して家庭内別居状態が

続いている。

家族は私など必要としていないのではないかと考える日も多くなっていた。

もちろん私のプライベートを知る人間は社内には誰もいなかった。会社の帰り本屋へ立ち寄る。ビジネスコーナーにあった facebook の本を手にとった。

(facebook か...) 友達や同僚、同級生、近所の人たちと交流を深めることのできる

ソーシャル ユーティ... 孤独感からか facebook について書かれた本をつい買ってしまふ。

家に帰って会社のPCを開く facebook のアカウント登録をしてプロフィールを書き込んでいく...

写真か... さすがに自分の顔は... と思い... PCに保存してあつた Hawaii の空の写真にする。

46歳 誕生日は... 1965年... 4月... 好きな本 好きな映画 好きな音楽...

趣味関心... 次々と書き込む。(自己紹介か...) 気の利いたコメントが浮かばずに「サラリーマンです... 1年の内半分は出張しています...」

と... 真つ正直に書き込む。

facebookを始めて1週間... 何も変わったことはなかった (誰にもfacebookを始めたこと知らないし... 当たり前か...)

ニュースフィードに書き込んでみる...

<facebookはじめました... > (なんだか夏に冷やし中華 始めました... みただな...)

使い方が まだ よくわからん... 単調な毎日... それでもまた変わらない月曜日はやってくる...

でも今までの月曜日と今日は少し違っていた... 私はデスクでコーヒーを飲みながら先日買ったfacebookの本を読んでいた...

「おはようございます」彼女がオフィスに入ってくる。

(んっ... 早いな...)

彼女はデスクに着くとPC の画面を見て黙々と仕事をしている様子だった。

私はコーヒーを持ってミーティングルームへ向かった。1時間ほどしてデスクへ戻るとまた次の

ミーティングが待っている・・・(ミーティングの次は・・・来客・・・か・・・)

18時過ぎやつとデスクに戻る・・・(あれっ)彼女はまだデスクでPCを見ていた。

(残業か?) オフィスには私と彼女を含め3名ほどしか残っていないかった。

彼女が私のデスクに近づいてくる・・・無関心を装うが心臓の鼓動が早くなつていく・・・

「堤部長・・・お疲れさまです」

「おお疲れ・・・」

「部長も・・・facebookを？」デスクの上の本を見て彼女が訊いてきた。

「えっ・・・ああ10日くらい前から始めたんだ・・・」

「へえ」そうなんですか」お先に失礼します・・・」そう言つて彼女は笑顔でオフィスを後にした。

(もしかして・・・彼女もfacebookを・・・) なんとなく そう思う・・・そう確信する。

PC でfacebookを開いて友達検索を試みる・・・彼女の苗字は・・・確か「しばさき・・・」

(漢字がわからない!) 名前は? 私は 彼女のことなど何も知らなかった・・・「しばさき・・・」

しば・・・しばさき・・・」

「しばさき・・・」で検索を続ける・・・そんな簡単に・・・facebookにアカウント登録している

かもわからないし・・・諦めかけたその時プロフィール写真に目がとまる・・・

(・・・彼女?) 間違いない 彼女だった プロフィール写真に笑っている彼女がいた。

(柴咲 亜美・・・あみ) 基本データを開く・・・1971年10月16日生まれ 血液型B型

プロフィールを開いて見る・・・居住地は・・・鎌倉か 好きなスポーツはサッカー・・・

メッシ・・・バルセロナ・・・好きな音楽・・・Bossa Nova 好きな本は・・・東野 圭吾か・・・彼女のことが少しずつわかってくる。

気づくとデスクの時計は22時を回っていた・・・オフィスには私ひとりしか残っていないかった。

(何 やってん だ・・・どうかしている・・・) 自制心が現実を引き戻そうとする。

彼女のことをこれ以上知って何になるんだ? 帰宅途中 自問を繰り返す・・・

答えなど出るはずもない(忘れよう 忘れないと・・・) そう思えば思うほどに彼女に惹かれていく・・・

それから数日間 facebook を開くのをやめていた・・・出張中 札幌のHOTELでPC を開く・・・窓札幌は昨日から

の吹雪・・・明朝は旭川への移動が待っていた。ベッドに横たわりながら ふつと彼女のことを考える・・・

facebookを開いて彼女のウォールを見てしまう・・・写真のアルバムを開くと目元が彼女にそっくりな女の子と腕を組んでいる女の子の写真が

目に入る・・・(娘さん・・・か?)

私の自制心は彼女を知りたいという気持ちに吹き飛ばされる・・・彼女も facebook を始めた

ばかりらしく友達に娘さんと思われる『柴咲 遥』という名前だけだった・・・

私は思い悩んだあげく『+1友達になる』をクリックする・・・

それは 高校の時クラスの好きな

女の子に想いを伝える時の 緊張感と似ていた・・・

(ああ・・・ クリック・・・ もう戻れない・・・) 少し後悔する

・・・ 外は冬の嵐が吹き荒れていた。

金曜日 北海道の出張も無事に終わり新千歳空港のラウンジで帰りの便を待っている間PC で

メールをチェックする。

facebookに書き込みがあった・・・ 柴咲亜美からだった。

<本当に? 本当に堤部長なんですか? 驚きました(ノ*。。(

ノ でも嬉しいです

今も出張中ですか?お身体気をつけてくださいね (o^ ^

o)ノ >

(・・・ お身体気をつけて・・・ か)久しく言われたことがなかったフレーズだった・・・

ラウンジで固まる・・・ 何度も何度も画面を読み返す。

(よかった・・・ とにかく・・・ よかった)心の声が伝わったかはわからないが・・・ 彼女からの

返信に安堵感のようなものが込み上げてくる・・・

こうして私たちふたりのfacebookがスタートした。

すこし特別な月曜日がやってきたfacebookでその後 彼女からの書き込みもない。

彼女は仕事にも慣れてきた様子で忙しそうにフロアーを動き回っている・・・ 無関心を装いつつも

その姿をデスクから見守る・・・ (あっ・・・)彼女と一瞬目が合う・・・ 10mの空間に先週末までは

なかった ふたりを結ぶ何かがあるような そんな気がしていた。

明日から3泊4日の沖縄出張が待っていた。

いくつかのミーティングを終えて沖縄でのプレゼン資料をチェックする・・・ 時計は22時を

回っていた・・・ 「はあ」思わず溜息が漏れる・・・ 23時過

ぎ帰宅する。

「ただいま．．．」返事などあるはずもない。妻はリビングでTVを観ている．．．

そのまま2階に上がりシャワーを浴びる。そしてそのままベッドに入る．．．そんな生活が3年

以上続いている。

私と家族との間には埋めることの出来ない深い溝が生まれていた。部屋に行きface bookを開く．．．何の書き込みもなかった。

(明日は8時30分の便だ．．．早く寝なきゃ．．．な)

翌朝 5時に目が覚める．．．まだ薄暗い道を自転車で駅に向かう

羽田空港へは約1時間半．．．

北風が頬を刺す．．．(沖縄は暖かいだろうな) 2年ぶりの沖縄出張だった。

羽田に到着してラウンジでベーグルサンドとトマトジュースの朝食を取る。

機内ではヘッドフォンをして眠っている．．． 着陸態勢に入りC

Aに起こされる．．．出張の時は

いつもこんな感じだ．．．

沖縄のきれいな海が機内から見える．．．

那覇空港に無事到着する。空港には現地駐在の喜屋武さんが迎えに来ていた。

「ハイサイ！ひさしぶりだね」堤さん 相変わらず忙しあんくとうやー」

「．．．ご無沙汰していました」

何度来ても沖縄はいい．．． 東京とは全く違う空気 時間が流れている。

少し早いが昼食を取ることにする。喜屋武さん行きつけの琉球そばの店に連れて行ってもらう．．．

『旨いな〜』思わず口に出る。沖縄での仕事も順調に．．．毎晩7

時前から深夜2時過ぎまでの連日

の宴会．．． 沖縄を満喫した2泊3日の出張も最終日となった．

．カチャーシーもだいぶ上手くなった

．．．20時発の便を予約していたが 空港に着いたのは3時間前
だった．．．喜屋武さんに頼んで

国際通りへ連れて行ってもらう．．．

「またきてくいみそーれー」かたい 握手を交わして そこで別れ
る。

国際通りをひとりぶらつく．．． 路地の店を覗いているとオレン
ジ色のシーサーの置物が目に入る。

（彼女へのお土産に．．．）一瞬そう思って箱に入れて包んで貰う。
小さな箱に入ったシーサーの箱をバックに入れてゆいれールで那覇
空港に戻る．．．

（お菓子とかの方が．．．良かったのかな．．．）

（何やってんだ．．．俺は．．．どうかしている）

羽田行きANA139便の出発の時間が近づく。

機内でビールを飲み いつものようにヘッドフォンをして眠りにつ
く．．．家に着いたのは深夜

1時近く．．．

真っ暗なりビングを抜けて2階に上がりシャワーを浴びる。

昔はよく出張でよくお土産を買ってきた．．．珍しいお土産を見て
喜ぶ顔を見るのが好きだった．．．

今はそれもなくなっていた。

バックからシーサーの入った箱を取り出す．．．（どうしようか．

．これ）

彼女に渡そうか．．．今になって 迷い後ずさりする。

月曜日．．． デスクの引き出しにシーサーの箱を入れる。

今日も午前中からミーティングと来客でスケジュールが埋まってい
た。

お昼 やっとデスクに戻る．．．彼女の姿は見えなかった 午後のスケ

ジュールもいつぱいで

ランチは手っ取り早くインドカレーにする。

午後のミーティングが終わってデスクに戻ったのは17時を過ぎていた……

肩がパンパンに張っている 10m先の彼女はPC画面を見て忙しそうにしている……

そんな姿をぼんやりと眺める (あつ沖縄の……) 引き出しを開ける。

シーサーの入った箱を取り出す…… (どうしようか……) 彼女に渡そうか……悩む その時彼女が

大きな溜息をついて背伸びをすると……タンブラーを持って席を立つ。

リフレッシュルームに向かう彼女の後を追う……誰もいない…… (今しかない)

リフレッシュルームで彼女は紅茶を入れていた……

「あつ 堤部長 おかえりなさい」

「あつ……た……ただいま……これ……お土産……沖縄の……」

少しぶっきらぼうな言い方で彼女に箱を手渡す。

「えっ……私に？ですか？ ありがとうございます……」彼女

は一瞬驚いた顔をしたが 笑顔で

受け取ってくれた。

「なんだろうな〜 うれしい」そう言っただけで彼女は戻っていった。

翌朝 facebookで彼女からの返信があった

<堤部長 お土産ありがとうございます (v^_^) Thank

s 沖縄のきれいな海 私も見に行きたいな〜

> ウォールの写真にドレスサーの上に置いてあるオレンジ色のシーサーがあった。

(うれしい……か……よかった) 沖縄のお土産を受け取ってくれたことよりもこうやって彼女と

言葉を通わせることが本当に嬉しかった。

早速．．．返信する。

<シーサー．．．気に入ってもらえてうれしいです！ 今度またお土産買ってきます 沖縄で撮った海の写真も送ります！>

夕方 facebookには彼女から「いいね」とコメントが入っていた

<やっぱり 沖縄の海きれいですね >彼女は相変わらず忙しそうにしていた．．．

そんな彼女をデスクから眺める．．．私の心の色が少しずつ 変わっていく。

珍しく19時過ぎに帰宅する．．．「ただいま．．．」テンションの低い声で玄関のドアを開けるが

何の反応もない．．．これもいつものことだった。スーツのまま2階に上がる．．．リビングからは

妻と子供たちの笑い声が聴こえてくる。そのままシャワーを浴びる．．．書斎などないが 誰も

使っていない6畳の和室が唯一この家で私がくつろげる空間になっていた。

それもいつまで続くのかわからない．．．出張の多い私には夕食の準備などなかった 冷蔵庫から

ヨーグルトを取り出して食べる

(いつも外食が多いから．．．今夜はこれでいいか)時折考える．．．この家に住む意味があるのか？

つてもはや私たち いや 私は家族の形体を成してはいなかった．．．

ここには私が 守るべきものはすでに 存在していなかった。和室にこもり来週からの名古屋出張で使うプレゼン資料を準備する．

(名古屋かぁ．．．味噌煮込みうどん．．．きしめん．．．)彼女

へのお土産を何にするか考える．．．
こうして

彼女のことを想っている時間に小さな幸せを感じていた。

そんな時 facebook に書き込みがあったくまだまだ寒いです
ね〜 今夜は石狩鍋にしました

ゞ(@ @)ノ やつぱり寒い時は鍋ですね 身体暖まりま
した 堤部長は何食べましたか？>

湯気の立った土鍋の横で微笑んでいる彼女の写真．．．

なんだか切なくなる．．．返信するく石狩鍋 旨そうですね まだ
寒いですね 来週から名古屋に出張です>

彼女に気持ちをさらけ出す勇気など今の私にはなかった．．．PC
を閉じてベッドに入る。

翌週 木曜日．．．8時発の NOZOMI で名古屋に向かう。

2ヶ月以上の難航しているクライアントとのタフな交渉が待ってい
た．．．新幹線の中で資料に

目を通す(あっ．．．富士山)

雪化粧をした真っ白な富士山が一瞬車窓から見える．．．何かいい
ことがある予感がした。

名古屋に着きタフな交渉がスタートする．．．ランチをはさんで交
渉．．．まったく合意出来る糸口

さえ見えない．．．(いいことなんて 全然ないじゃないか．．．)
1日目の交渉を終えHOTEL にチェックインする．．．「ふう〜

疲れた．．．」エレベーターで
独り言が出る。

部屋に入りバスタブにお湯を張る．．．facebook を開いて
みる 彼女からの書き込みがあった。

<こんばんは ・w・ 堤部長 今夜は名古屋ですか?こんな
こと言ったら怒られちゃいます

けど．．． いろんなところ行ける部長が少し羨ましいです お仕
事あまり無理しないでがんばって

くださいd(@^。)/ファイトゥ>

こんなに励まされたのは．．．明日もがんばろう．．．(単純だな．．．男つて．．．)

そう思っても彼女の言葉はうれしかった。

(羨ましい．．．か)風呂に入る…彼女のことを想う HOTELのデスクで彼女に返信する。

<こんばんは 昨日 新幹線で真っ白な富士山が見えました たぶん今週末まで名古屋です．．．

タフな交渉が続きます でも大丈夫 問題ありません!>

本当は大丈夫なんかじゃない．．．彼女が心配するようなことがないように強がって見せる。

金曜日．．．タイムリミットは刻一刻と近づいていた。交渉は一進一退を繰り返している．．．

午前中には合意に至らず昼食をはさんで再び大詰めの交渉が始まった。

ここ数年でもベスト5に入るタフな交渉だったが 15時過ぎやつと合意の道筋が見えて

交渉相手と握手を交わす．．．通りに出てすぐにタクシーを捕まえる．．．

「松坂屋まで．．．」(間に合うかな．．．)松坂屋 地下1階の

『山本屋総本家』へ急ぐ．．．

店は地元客と観光客とで混雑していた。店員に4人前の味噌煮込みうどんを注文する．．．

新幹線ホームへ小走りで向かい何とか飛び乗る．．．シートに座り

深呼吸をする．．．

「ふう」

(味噌煮込みうどん 口に合うかな? 4人前にしたけど．．．足りる?．．．彼女は何人暮らし?)

(こんなお土産 本当は 迷惑なんじゃ．．．)またしても不安が頭をもたげる．．．

このままだと会社に着くのは．．．18時30分過ぎ．．．
（まずい．．．彼女の勤務時間は17時30分まで．．．もう帰っ
ているかも）新幹線の中で心配は
尽きなかった．．．

品川駅に着いてから小走りに会社へ戻る．．．18時46分 オフ
イスには数人しか残って

いないかった．．．（やつぱり…間に合わなかったか．．．）

「ふう〜」走ってきたせいで息が上がる．．．
買ってきた味噌煮込みうどんを机の上に置く．．．（これ．．．ど
うしよう）

「お疲れ様でしたあ」廊下から彼女の声が聴こえる．．．
すぐに廊下に出ると エレベーターホールに向かう彼女の姿が見え
た うどんを持ってすぐに

彼女の後を追う．．．

「あつ堤部長．．．お疲れ様でしたあ お戻りになられたんですね
」

「ああ．．．これ．．．名古屋の ハア．．．お土産」
「名古屋の．．．なんだか重い．．．なんだろう？ありがと〜」
ざいます じゃあ．．．失礼します」

そう言い残して笑顔でエレベーターに乗って行った。

ハア．．．息が上がる （とにかく間に合ってよかった．．．）息
が上がる（運動不足だな．．．）

憂鬱な週末が過ぎて日曜日の夜．．．

彼女との出逢いの日を境にして月曜日が待ち遠しくなっていた。

facebookを開くと彼女からの書き込みがあった

<堤部長 名古屋 お疲れ様でした（p|:）＼（^^） 味噌
煮込みうどん今晚作ってみました

（ 「 * ）母とふたりで「ふう〜ふう〜」言いながら頂きまし
た とつても美味しくて身体も

暖まりましたご馳走様でしたは また明日（ ）（おやすみ

なさい >

彼女の絵文字にも少し慣れてきた。

味噌煮込みうどんの入った土鍋と湯気の立っている熱々のうどんを本当に旨そうに食べている

彼女の写真を見て思いが募っていくのを感じる。

<味噌煮込みうどん 旨そうですね 今夜は冷えるから身体暖まっ
てよかったです 次は

東北 秋田県へ出張です >

<秋田ですかぁ 寒いんでしょうね 雪どのくらい積もってるの
かな〜今度写真送ってください

(「、ー、」ノ ヨロシク >

<今日も寒いですね 又ク又ク (*) \ コタツ

昨日 会社の帰りバーゲンでマフラー

買ったちゃいました >

<今夜 鎌倉にも雪が降りましたぁ 雪景色の鎌倉の街も好き >
彼女との距離がどんどん近くなっていく．．． そんな気がしてう
れしかった。

<秋田は気温 -3 です 外は吹雪いています．．．今夜は接待
で秋田の地酒を飲みました

旨かったぁ (仕事だけどね．．．) >

<雪景色の鎌倉か．．．きれいなんでしょうね〜 どの季節が好き
ですか? >

<鎌倉の雪景色も好きだけどやっぱり春の鎌倉 桜の鎌倉が大好き
です >

<堤部長は今年初詣に行きましたか? 私は娘とふたり 毎年 鶴岡
八幡宮に行ってます。

今年は おみくじ引いたら 大吉だったんですよぉ (^) b >

(娘さんか．．．) 思い切って facebook で訊いてみる

<初詣は近所の神社に行きました おみくじ私も大吉でした 今年
もいい年になるといいですね

娘さんはお幾つですか？>

翌朝返信がきていた<娘は高校2年生です 一緒には住んでいませんけど．．．留学先のHawaii

から帰ってきて 初詣に行きました休みが終わって 帰っちゃたんで少し寂しいです (´ー、。)

(高校2年．．．17歳 か．．．)彼女の事を もっと知りた
い．．．その思う反面．．．彼女のことを知る

のが少し怖かった。

そんな思いを乗せて今年2度目になる秋田出張のため羽田空港へ向かう．．．

今年の東北地方は記録的な豪雪で飛行機も欠航が多かった。

ANA879便 20時発の最終便．．．ラウンジはこれから出張するサラリーマンで混雑していた。

facebookに書き込む <今 羽田空港です 20時の便で秋田へ出張です 何とか飛びそうです

金曜日には戻ります>

10分遅れで秋田便は出発した 秋田空港へは結局20分遅れで到着してバスで市内へ向かう

外は雪 少し吹雪いている バスのヘッドライトに照らされる雪をただ ぼんやりと眺める。

HOTELにチェックイン出来たのは23時近くだった．．．いつものようにバスタブにお湯を張る。facebookには返信があつた<秋田着きましたか？

また雪ですか？ちゃんと晩御飯 食べましたか？ (´ー、)おやすみなさい >

こうしてふたりはお互いの孤独を埋めるかのようにfacebook

k に想いを綴っていく。

金曜日 秋田での仕事も順調に終わり秋田駅まで送って頂く昨晩は夜中の2時まで飲んでいて

頭がガンガンしている．．．一緒に飲んでいた鈴木社長はケロつと

している・・・

やはり東北の人は酒が強い・・・そういう私も高校までは山形庄内にいたのだが。

「ありがとうございます」「せばな・・・」鈴木社長が紙袋を手渡す・・・稲庭うどん 東北の人は本当に暖かい もう一度礼を言い別れる。

バスの時間までまだ少しある・・・この時期としては珍しく青空が出ている太陽の光が積もった雪

に反射して眩しい。彼女へのお土産は『きりたんぽ』と決めていた 駅から

5分ほど歩き鈴和商店に入る 店内は炭火で焼いた 『きりたんぽ』の香ばしい匂いがしている。

「いらっしやいませ」(ふたり・・・か)「きりたんぽ・・・5本を2セットください・・・」

あと このスープも2つ・・・」
「毎度ありがとうございます」焼きたてでまだ暖かい 作り方が書いてある冊子も入れてもらう。

両手いっぱいのお土産を抱え秋田空港までのバスに乗り込む。

羽田空港から京急で品川に・・・荷物が多くて腕が痛い 品川駅から人波を抜けてデスクに戻った

のは17時近くになっていた。「ふう〜」大きく息を吐く・・・オフィスを見渡すと彼女はいつもの

様にPC画面に見入っていた。チラッとこちらを見たような気がしたが そのままオフィスを

出て行った。

PCでメールをチェックする しばらくすると突然彼女の声が聴こえる

「堤部長 お疲れ様でした」そう言って 暖かいチャイティラテをデスクに置いた

「えっ なんて・・・ありがとうございます・・・」突然のことでもた 動揺

してしまう。

「スタバの 店長さんに訊いたんです．．． 午後 疲れている時 堤部長はホットのチャイラテだって」

「ああ．．．あつつちよつと待つて」戻ろうとする彼女を引き止める。

「これ．．．秋田の 『きりたんぼ』 それとこれ貰い物だけど 稲庭うどん 『きりたんぼ』 は

余ったら冷凍して．．．」

「いいんですか？ こんなに．．．」彼女が心配そうに訊いて来る。

「ああ全然．．．問題ないから」

「部長のお宅の分は．．．？」

「大丈夫．．．問題ないから」

彼女はいつもの様に笑顔で．．．軽く会釈をしてオフィスを出て行った 彼女が買ってきてくれた

チャイテイラテを一口飲む（暖まる．．．心まで）彼女の心遣いがうれしい。

私のお土産好きは父譲りだった．．． 父は子供のころ出張に行く度に その土地の珍しい

お菓子など買ってきては「どうだ？旨いか？そうか．．．」と私たちが食べるのを嬉しそう

に見ていた．．．今は私にそう言うてくれるのは彼女だけだった。

このお土産は彼女に喜んでもらうことでもあり 実は自分自身のためでもあったのだ。

こうしてふたりは facebookを通していく幾千もの言葉を重ねていく．．．

facebookに書き込みがあったく堤部長 (* ^ - ^)ノ

こんばんわぁ 秋田出張はいかがですか？

あまり飲みすぎないでくださいね(=^_^=)o>

(そっか 昨晚の．．．)返信する <昨日はAM2:00 まで

で飲んでしまいました 秋田の地酒

旨かったから(少し反省しています)お土産(さつき渡したけど...)

『きりたんぼ』にしました 1本1本炭火で焼いているお店で熱々のを買いました。

牛蒡と鶏肉も忘れないで地元ではセリを入れるみただけど あとレシピの冊子にも書いて

あるけど... 『きりたんぼ』は煮すぎないように... また写真送ってください >

チャイティラテを飲み干し残っている仕事を片付ける。

日曜日 22時 PCでたまっている役員への報告書をまとめる

明後日の夜からは北海道

北見から札幌 そこから長野への3泊4日の出張が待っていた。

そんな時 彼女からの書き込みがあつたく堤部長 こんばんは

『きりたんぼ鍋』作ってみました

牛蒡も鶏肉も入れましたよー頂いたスープにもコクがあつて本当に美味しかったです

(*^。^*) 『きりたんぼ』もモチモチで 残ったのは冷凍してまた頂きます。

写真もアップしたので見てください 部長のお土産っていつも美味しくて 暖かくて...

ありがとうございます。今週はまたご出張ですか？

おやすみなさい >

写真を見ると 旨そうな 『きりたんぼ鍋』の写真とそれを旨そうに食べる彼女が写っていた。

(ほんとうに旨そうに食べるんだな...)返信する

<本当に旨そうですね 『きりたんぼ』喜んでもらってうれしいです。明日の夜から北海道

へ行ってきます！ 私は寒さには強いから大丈夫です。 >

Valentine's Day

(なんだか言い方 硬かったかな．．．) 返信してからそう思う．．．
まだ接し方がぎこちない

．．．PCをシャットダウンして出張の準備をする．．．3泊4日
分の下着 靴下 ハンカチ
ワイシャツ ネクタイも予備を1本．．．これもいつものことだっ
た．．．

(ああ靴も．．．) 玄関の下駄箱からブーツを取り出す。

月曜日 出張の衣類を持って いつもより早く家を出る スタバが
オープンすると同時に

店内に入る「おはようございます 堤さん今朝は早いですね」

「ああ荷物多いから．．．明日の夜から北海道．．．」

「相変わらず忙しいですね」 そうだ 金曜日チャイラテ届きまし
た？」

「えっ ああ．．．うん」

「彼女．．．突然来て 堤部長がいつも頼んでるの下さって．．．

コーヒーの方が良かったですか？」

「．．．いや大丈夫 問題ない ありがとう」 B L T & a m p ;
エッグとコーヒーをテイクアウト

してオフィスへ入る。

(彼女 わざわざ 買いに行つて．．．) 「部長 ミーティングの
時間です」

「ああすぐに行く．．．」

「部長じゃあこれで進めていいですね？ 部長？大丈夫ですか？」

「んっああ進めてくれ．．．」

(まずい 彼女のことが頭から離れない．．．)

私は彼女に恋をしている？ たぶん．．．きつと そんな気持ちに

自分が一番驚いていた

(恋? . . . そんな . . .) でも . . . 間違いなくこの気持ちはずっと

遠い昔に感じたことのある . . . 純粋な恋心そのものだった。

(高校生じゃあないんだ . . . 彼女を追いかける? そんなことは . . .)

「堤部長?」

「んっ?」

「大丈夫ですか? 本当に . . . 具合でも?」アシスタントの天谷が心配して訊いてくる。

「ああ大丈夫だ 問題ないじゃあ 今週も頼んだぞ」

「はい」上の空だった . . . 朝のミーティングが終わりデスクに戻る (まずい . . . 仕事に 集中しないと . . .)

そう思っているとき 彼女が私のデスクに向かってやってくる . . .

「おはようございます . . . 」

「おはよう . . . 」

「午後のコンプライミングの資料です . . . 」

「ありがと . . . 」彼女から資料を受け取る。(きれいな手 . . .) 彼女の指は細くて

ネイルには桜色のマニキュアが光っていた(指輪 . . .) 無意識に

彼女の左手を見る

. . . 薬指に指輪はなかった。

「出張 お気をつけて . . . 」彼女は小さい声でそう言って戻っていった。

報告書の上にはピンク色の小さい袋がおいてあった . . . 中を見てみるとクッキーが入っていた。

デスクに戻った彼女を見る . . .

彼女は私の方を見て . . . 一瞬 微笑んだ後 PC画面に目をやった . . . その袋をバックに

入れて別のミーティングへ向かう。

羽田へ向かうANA4753便 16時15分女満別行きで北見市へ入る予定だった 空港ラウンジで

facebookを開く 彼女からの書き込みがあった

<堤部長 いつも美味しいお土産ありがとうございます > (

― *) < 昨日クッキー焼いたので

北海道にお供させてください (〃・ー・)ノ いったらっしやい > 彼女のこぼれるような笑顔が思い浮かぶ . . . クッキーを1枚食べ . . . うまい) 恋 . . .

返信する <これから女満別へ発ちます クッキー おいしかった

ありがとう >

なんだか まだぎこちない . . . (今度は少し 絵文字にもトライしてみよう)

(どれだけ言葉を尽くしても . . . たったひとつの想いを彼女に伝えられない . . .)

いや . . . 伝える勇気を私が持っていないだけだった。

1時間半ほどのフライトで女満別空港に到着する . . . 気温 - 7

2年ぶりの北見はクレーム

処理だった 迎いに来てくれた札幌支店長と北見市内のHOTELにチェックインする。

北見は焼肉屋の多い街だった 鮮度のいい食肉が地元で安く流通しているからだそうだ . . .

「四条ホルモン」に入る 七輪で焼肉を焼きながら改めてクレームの報告を聴く

肉の焼ける香ばしい匂いが店内に充満し抑えていた食欲を呼び覚ます。

ビールも進む 北見ワインも勧められるままに飲んでみる 22時 店を出る気温は

- 15 まで下がっていた。

HOTELに戻りいつものようにバスタブにお湯を張る . . . お湯が溜まる間facebookに書き込む

<北見は気温 - 15 夕食は焼肉屋へ行きました 北見ワインも美味しかった

明日の夕方特急オホーツクで札幌に移動です>焼肉屋で撮った写真を付けて送る。

バスタブに浸かる . . . 「ふう〜」いろんなことが頭の中を駆け巡る (どうすれば . . .)

ベッドに横たわりPCを閉じようとする返信がある。

<ひいえ〜 - 15 ですか? (*。°。(ノ 未体験です . . . 天気予報観ていて

堤部長 今この辺りかな〜って 明日は札幌ですか? あまりがんばり過ぎないでくださいね . . . GOOD NIGHT (; ;)

>
彼女からのひと言 ひと言が凍りついた私の心を少しずつ解かしていく . . .

<ありがとう> (| *) < がんばって絵文字を入れてみる (なんだか . . . 少し 変 . . .)

翌朝9時 支店長と代理店に向かいクレームのお詫びをする . . . 代理店は私たちよりも

クライアントに直接詫びることの必要性を話し私たちはクライアントの元へ向かう。

怒りが顔に滲み出るクライアント . . . 無言の重苦しい時間が続く
それでも申し訳ない

本当の気持ちをぶつける . . .
1時間後にはクライアントと握手をして席を立つ。

「今度飲みに行きましょう 堤さん また来てください . . .」
「はい . . . ありがとうございます ぜひ . . .」こういった瞬間

が一番嬉しい 支店長に
北見駅まで送ってもらおう。

「堤部長 すごいですね . . . クライアント最後には笑顔で見送ってくれて . . .」

「よかつたな．．．本当の信頼を築くのはこれからだから がんばって」程なく駅に着く

支店長と別れ札幌へ向かう。

14時19発 特急オホーツク6号札幌に着くのは18時47分．．

（4時間半か．．．）

飛行機での移動も考えたが 少し立ち止まって考える時間が欲しかった

発車のベルが鳴り列車はゆっくりと動き出す 真っ白な大地をひた走る

30分程で腰が痛くなる．．．

（やはり飛行機にした方が．．．）少し後悔する。

1時間ほど走ったであろうか？車窓から見える風景もさほど変わらない

「くたびれだあ〜」思わず庄内弁が出てしまう。

時間を持て余しPCをバックから取り出す．．．（メールも．．．圏外か）

私にはまだ非公式ではあるが転職の話が伝えられていた それも国内じゃなく

本社があるスウェーデン ストックホルムへ5年間．．．キャリアアップには必要な

転職であることは重々理解していた。時期を同じくしてヘッドハンティング

エージェントからは転職の誘い話が来ていた。

（そろそろ返事しないと．．．な）もちろんこのことは誰も知らない．．．

社内に相談出来る人間はいなかった ストックホルムへの転職を妻に切り出した

結果はわかっていた．．．

「単身でしょ行ったらいいじゃない．．．」

こんな感じか．．．しかし海外転職は家族同伴が原だった。

転職した場合 勤務地は東京だったが46歳にしての転職は相当の覚悟とパワーが必要だった。

これも妻からの返答は想像できた・・・「年収は？どのくらい上がるの？・・・」

たぶん一番に訊いてくるだろう。このまま家族を続けるのか？続ける意味があるのか？

私には守り抜く家族の存在が見えなくなっていた。大きな溜息をついて車窓に目を

やる山並みを抜け列車は旭川市内へと

近づいていた。デッキに出てストレッチをする・・・腰と肩がパンパンに張っている

札幌までは2時間弱・・・少しお腹も空いてきた。

青い空と真っ白な雪原を写真に一枚収める・・・

札幌駅に着く・・・「ふう〜」そのままJRタワー6階に上がり根室の回転寿司

「花まる」へ向かう店は観光客でいっぱい 20分ほど待つて席に案内される。

東京ではあまり見ないネタが回る・・・

めふん（鮭の腎臓）タラバ タラバの外子 ホッキ貝・・・どれも新鮮で旨い

鮭の切り身が入った石狩汁は冷えた身体をやさしく温めてくれる。

翌朝 新千歳空港のラウンジでウォールに書き込みをする。

<昨日は4時間半かけて札幌に移動してきました 車窓から撮った 真っ白な草原の写真

送ります 札幌では回転寿司を食べました 東京の普通のお店より旨いかも 石狩汁の

写真も・・・なんだか食べ物の写真ばかりですね・・・

これから羽田経由で長野に入ります 〃 〃 〃 (・:・*・、)ノ >

(絵文字も少しは様になってきた) 新幹線で長野駅に着いたのは2

2時を回っていた・・・

夕食は新幹線で駅弁を食べた 北海道も寒かったけど長野も負けずに寒かった。

HOTELにチェックインしていつもの様にバスタブにお湯を張る

・ 長時間の移動で腰が痛い。

そしていつもの様にfacebookを開く・・・

＜いいなあお寿司＞、＜ぶーぶー＞ そういえば最近お寿司食べてないなあ

堤部長は何が好きですか？ 私は中トロとか 穴子とか 玉子 何でもいけます

石狩汁もおいしそう（。ー。'＊）ジュルルル これなら私にも作れるかも 私の今日

のランチは手作りお弁当v（。・。・（ もう 長野ですか？今週は戻らないんですか？

長野寒いですか？

（ ）おやすみなさい >

なんだか 彼女に逢いたくなくなった どうしようもなく・・・ 逢いたくなくなった。

翌朝 レンタカーを借りてクライアントへの説明会会場に向かう

・その後松本市内に

移動してミーティングを行いましたまた長野へ戻ってくる予定だった。

10年来の付き合いの りんご農家「丸青園」に連絡を入れ17時位に伺う旨を伝える・・・

ここの「サンふじ」を初めて食べた時のことは今でもよく覚えている 半分に割った

りんごの中心には熟した蜜が入っていて 本当に旨かった。

このリンゴを彼女にも食べてほしいと思っていた。

高速を下りてアップルラインに入る お店の駐車場に車を停める

「堤さん お元気そうで・・・」

「おやじさんも．．．急で悪いんだけど1箱お願いします」

「毎度ありがとうございます 堤さんの注文は特別に厳選したの送
らないとなあ」

「頼みますよ．．．」こうして月曜日着くように会社に送って貰う
ことにした。

本当は彼女の自宅に．．．とか思ったが住所も知らないし 突然リ
ンゴ1箱届くのも．．．
迷惑なんじゃ．．．と思い会社に送ることにした。

レンタカーを返して長野駅に向かう（ 東京駅に着くのは19時5
2分か 直帰だな．．．）

これじゃあ．．．夕食はまた新幹線で駅弁だな．．．
大宮駅で降りてスーツケースを引いて埼京線地下ホームへ（この
感じだと駅に着く

のは20時30分くらいか．．．）大泉学園駅に着く 家には帰ら
ずスタバに入る壁際の席に
座る「あゝ疲れた．．．」（4泊の出張はさすがにキツイな．．．）
バックからPCを取り出す．．．

「あつ」PCケースから彼女からもらったクッキーが1枚出てきた。
店員の目を盗んで ハート型のクッキーを頬張る．．．f a c e b
o o k kに書き込む．．．

< たいま 月曜日 長野のリンゴ農家から会社へリンゴを送りま
した とつても美味しい
サンふじです >

PCを閉じてスタバを後にする。（あゝまた週末がやってきた．
．．．）この2日間が早く

過ぎ去ることをただ願う 月曜日が待ち遠しい．．．玄関のドアを
開ける．．．

「ただいま．．．」洗濯物をスーツケースから取り出して洗濯機
に入れる．．．

そのままシャワーを浴びてベッドに入る．．．（ほんとうに疲れた．

．．．（日曜日の夜．．．

憂鬱な週末もあと数時間だ。「はあ〜」（疲れがとれないな．

．．．）（昨日 予定外に

アウトレットモールへ行ったからか．．．）月曜日 朝 サプリメントが効いたのか？

気持ちよく起床し駅に向かう．．． 冬晴れ 冷え込みもさほど感じなくなった 春が近づい

ているのを感じる。今日は午前中に八王子のクライアントへ直行する．．．八王子駅は東京

へ向かう通勤客で混雑していた。

待ち合わせの京王プラザホテル1階のスタバに入ってPCを開く
<おかえりなさい（；^ ^ A出張お疲れさまでした（〃^ー^）

ノ 長野のサンふじ！私リンゴ

大好きだから楽しみです 鎌倉は少しずつ春が近づいています（
ー、*）．．．*：*．．．>

八王子の打ち合わせは思っていた以上に長引いて終わったのが12時15分を過ぎていた．．

会社に連絡を入れる。

「堤部長 リンゴご馳走様です〜」セールスアシスタントの天谷だった。

リンゴは予定通り届いた様だった。八王子の定食屋でアジフライ定食を食べて 14時半過ぎ

にデスクに戻る。

（デスクに着くのは1週間ぶりか．．．）なんだか すごく 長い時間が経ってしまった気がした。

彼女に視線を向ける．．．彼女がこちらを見ている 思わず視線を外す．．．恐る恐るまた

彼女の方を．．．すると彼女は私を見て微笑んで 髪を左耳にかけ
る そしてまたPCに視線

を落とした．．．私は彼女のこの仕草がとても好きだった。

チャイティラテを一口飲んでからミーティングルームへ向かう15時から来客の予定が入っていた。

18時過ぎにデスクに戻る．．．彼女はもう帰った様子だった。

「部長 リンゴご馳走様でした」

天谷が声をかけてきた。「旨いだろ このリンゴは？」天谷は入社10年目の直属の部下だ。

「ほんとうにこんな美味しいリンゴ食べちゃうとスーパーのリンゴなんてもう食べられませんよ」デスクワークの女性スタッフで分けたのでひとり3個くらいは渡ったと思います

ます皆 喜んで持って帰りました。ああ そうそう．．．この前コンプラの柴咲さんと

ランチ一緒に行ったんですよ」動揺する．．．
「．．．」
「彼女 元CAだったみたいですよ」(CAって．．．キャビン．．．)

「ああ．．．そう」全く関心がない素振りで答える。

「なんで辞めちゃったんですかね？なりたくてもなれない人いっぱい いるのに．．．

じゃあ お先に失礼しますう」

そう言つて天谷は足早にオフィスを出て行った。

(CA．．．なぜ？辞めたのだろう?)よく考えたら彼女のことなど何も知らなかった．．．

携帯の番号でさえ．．．彼女のことでもたいたっぴいになる。

デスクを離れエレベーターでスタバに向かう．．．

「こんばんは．．．チャイ ラテ．．．ショートで」お気に入りのタンブラーを渡す．．．

「堤さん まだ仕事ですか？」

「うん．．．」持ってきたPCを開く．．．facebookに

は何も書き込みがない。

1時間ほど時間をつぶしデスクへ戻る．．．フロアーには誰もいなかった（帰るか．．．）

バックにPCを入れ エレベーターで降りる。（CA かあ．．．国内線．．．）

水曜日からは新潟への出張が入っていた．．．（今度こそ 帰ろう．．．）

水曜の朝5時30分過ぎに家を出て自転車で駅に向かう．．．まだ風が冷たかった。

9時前に新潟駅に到着し万代まで歩く．．．新潟はまだ冬空だ．．．支店に着いてPC

を開くと彼女からの書き込みがあった。

<おはようございます（^|^） 頂いたりんご今朝食べましたよ
お〜なんですかこの

リンゴw（。o。）w メチャクチャ美味しかったです（><）
bスーパーで買ったりんご

と比較になりません 母も感激していましたo（*^ ^*）o
堤部長はフルーツでなにが

一番好きですか？ 私はもちろん りんご 苺も好きかな〜
葡萄も．．．>

<私もやっぱり リンゴかな〜 あと梨も好き よかったらまた送
ります >

（CAだったって本当？そんなこと訊けないよ．．．）新潟での
仕事を終えて直帰する

．．．池袋駅の西武百貨店では今年もSt・Valentine
's Day のチョコレート売り場が

賑わっていた．．．TVのアンケートで妻が夫にチョコレート
をあげるのは70%と言っていた

．．．我が家は残り30%だった．．．昔 手作りチョコをもらっ
た記憶はあるが．．．

ここ数年 妻からもらった記憶などなかった。

月曜日．．．電車で大きな紙袋を持った女性とすれ違つ．．．

(そうか．．．Valentine's Day か．．．)

いつものようにスタバでテイクアウトした

コーヒーを持ってデスクへ．．．フロアーには私しかない。

「おはようございます．．．」突然 彼女が私の左横に立っていた。

「おっ おはよう．．．早いね．．．」彼女の声に 動揺する．．．

彼女はネイビーのコートを

着たままだった。

「りんご 本当に美味しかったですよ．．． 堤部長甘いもの大丈夫でしたよね？」

これ良かったら食べてください．．．」そういつて水色の手提げバッグを差し出す。

「．．．ありがとうございます．．．」彼女は笑顔でオフィスから出て行った。

中をのぞく．．． 同じ水色の箱にシルバーのリボン．．． 微かにチョコレートの甘い香りがする。

(Valentine's Day ．．． フロアーにまだ誰もいないのを確認して箱を開けてみる．．．

箱の中には直径10cmほどのザッハトルテが入っていた．．．

(これって 手作り．．．?)

ケーキの上にはハート型のチョコレートのものっていた。ザッハトルテ．．．

私の大好きなケーキだった。(私のために? ．．．まさか．．．)

そんなことを思ってしまう自分が嫌だった。

誰も来ない間にリフレッシュルームにある冷蔵庫に入れておく．．．

デスクに 戻ると

彼女もPCを立ち上げていた．．． 髪を左耳にかける．．．しばらくふたりきりの時間が流れていく

「おはようございます」

「おはよう」他の社員が入ってきて日常が戻っていく．．．19時過ぎやつとデスクに戻る

「はあゝ疲れた．．．」

机の上には百貨店で買ったと思われるチョコレートが1つ．．．メモには

「義理チョコです！お疲れでした」（天谷か．．．）会社の冷蔵庫を開ける．．．

いくつかのチョコが入っている中から水色のバツクを取り出す。

本当はすごく嬉しかったのに．．．その表情を彼女に悟られるのがとても恥ずかしかった．．．

ザッハトルテが横にならないように慎重に持つて帰宅する．．．

「ただいま．．．」すぐ

に2階に上がりクローゼットに水色のバツクを隠しリビングへ

降りていく。「パパ．．．はい これ」娘からチョコを渡される

「ホワイトデイのお返し

よろしく」何にしようかな」妻が続ける．．．

「はい これ．．．電話しておいてよ．．．」

「ああ わかった」毎年届く義理の母からのチョコレートだった。シャワーを浴びた後、こっそりと キッチンから皿とナイフを素早く持ち出し2階へ上がる

．．． ザッハトルテを慎重に箱から取り出し皿に移す。

部屋にチョコレートの甘い香りが満ちていく慎重にナイフを入れる

．

（あっフオーク．．．）（何度もキッチンに行くとき怪しまれるし．

．）そのまま手で摘んで

食べる（うまい．．．）濃厚なビターチョコレートとしっかりとりしたスポンジケーキ

酸味のある爽やかなアプリコットジャム。

（これ 本当に彼女が．．．）有名店に引けを取らないほど完成度が高かった。

(あつ．．． まずい 写真 撮らないと) 半分ほど食べてしまっ
たザツハトルテを携帯で撮る。

お世辞抜きで彼女のザツハトルテはうまかった ハートのミルクチ
ョコレートを口にする．．．
なんとも幸せな気持ちに包まれる。
早速 f a c e b o o k に書き込む。

< ザツハトルテすごく美味しかったです)。 ^ (v 本当
にお店に出せるくらい

すごい! あつという間に食べました 写真送りますありがとう)

*^^*ノ >初めてもらった

V a l e n t i n e ' s D a y の日のことを思い出す。

(確か中学1年の時．．．うれしくてチョコレート飾っておいたよ
な〜．．．)

彼女からのプレゼントはそんな昔のことを思い起こさせてくれた．．

次の日彼女からの返信があつた．．．

< 堤部長からそんなに褒めてもらえると嬉しいです (^^) b G

o o d ! 日曜日 がんばって

作つた甲斐がありました 私 ザツハトルテ好きなので、自分
の分も作っちゃいました

(; ^ | ^ A 私は来週2日ほどお休みを頂きます。おやすみな
さい G O O D N I G H T

(; ;) ノ >

その後も彼女との f a c e b o o k は続いていった．．．

< 長崎に来ています! お昼は長崎ちゃんぽんを食べました。お土

産は「松翁軒」の

カステラにしました300年以上も前からある老舗のカステラ屋さ
んです >

< ええ〜 W) 。 。 (W 300年以上も前の? 江戸時代? 歴史得
意じゃなくて) - - ; A ∴ >

<カステラ しつとりしていて 美味しかったです さすが30
0年 ザラメのところが

めちやくちゃ 好き v (^ | ^ v) もうすぐ3月ですね

大好きな 桜の季節です。

(|| ^ | ^) ノ 堤部長はお花見とか行きますか？ >

<お花見かぁ . . . しばらく行ってないな 会社行く駅まで
の桜並木を見るくらいかな

(. . .) >

<岩手県に出張です 東北はまだ春は先みたいです。岩手には岩
を割って生えている樹齢

360年の石割桜が有名です。岩手は海の幸山の幸が本当に旨い . . .

・ 釜石 中村家の

海宝漬をお土産にしました 冷凍だから自然解凍して食べてみてく
ださい

v (* . . ^ *) - ok!!! >

私のお土産好きは父譲りで 今に始まったことではないが . . .

彼女へのお土産は少し

特別で . . . 口下手な庄内人のちよつとした一方的なメールみたい
なものかも知れない . . .

彼女は いつも f a c e b o o k で感想なんかも返してくれる そ
れに私は救われて 失いかけていた

何かを取り戻していく。

でもどれだけ言葉を尽くしても 日本中のお土産を彼女へ届けても

たった一つの想いを

彼女に伝えることは出来なかった。

そんな私の気持ちを知ってか知らずか . . .

<海宝漬ご飯にのせて食べました 三陸の海の幸が一体になって
ご飯おかわりしちゃい

ましたよ〜メカブがいっぱい入っていて とってもやわらかくて

おいしい)

(「*」)

<良かった 私も海宝漬をのせて食べるご飯が大好きです 9日からは仙台に出張です!

鎌倉の桜は3分咲きくらいですか?>

<大変ですね (;-|-) #3 堤部長は ひとりで寂しくないんですか?ごめんなさい

変なこと訊いちゃいましたね(「*」ハンセイ... 鎌倉の桜 今年は開花が少し遅れる

みたいです。仙台まだ寒そうですね お気をつけて >

(寂しい... か...)長い間の孤独が寂しいっていう感情を麻痺させているのかも 知れない...

3月9日水曜日 東京駅から2泊3日の予定で仙台へ向かう... 東京駅の大丸は来週に迫ったホワイトデイのギフトで溢れていた。彼女へのホワイトデイは「マカロン」と決めていた... 春風が気持ちいい...花粉なのか?マスク姿の人も多くなっていた。

大丸地下で弁当を買い新幹線に乗り込む... 銀むつ 弁当を大宮に着く前に平らげる

(マカロンは普通の焼き菓子とは違い賞味期限が短いから... 14日当日に会社を

抜け出して買いに行こう)そんなことを想うのも楽しかった。

3月11日金曜日 仙台でのクライアントの説明会も順調に終わり 気持ちは充実していた。

その後 仙台支店でのミーティングが終わり品川へ戻る予定だった... 14時26発の

『はやて』を予約していた。 11時30分にミーティングが終わり 皆で昼食に出る

「今日は俺がごちそうするよ!」

「おお～部長　ゴチになります！」

「じゃあ中華にしますか・・・」

「おおいいね～」調子に乗って腹いっぱい食べる・・・

(まずい　また食べ過ぎたな・・・　くるしいい)

「じゃあ　また・・・　次回のミーティングまで・・・」

「お疲れ様でした～」部長　ごちそう様でしたあ「仙台支店を出て駅に向かう。

(運動のために歩こう・・・)　少し早足で歩き出す。

(そうだ・・・白謙のかまぼこ　お土産にしよう・・・)　10分ほど歩いて駅に着きそのまま

地下1階の白謙へ向かう・・・　(お母さんとふたりだから・・・)

「これ1つください・・・」

「はい　ありがとうございます！　極上笹かま　と　白謙揚げのセツトですね」

念のため保冷剤をつけてもらう。

改札を抜けホームに上がると2本前の「やまびこ」が停車していた

・・・
(「やまびこ」の方が4分東京に早く着く・・・)　少しでも早く東京に戻りたい・・・

迷わず「やまびこ」の自由席に飛び乗った。

乗ると同時にドアが閉まり新幹線は静かに動き出す・・・　仙台駅始発ということもあり

自由席も空いていた。3号車8番Eに座りバックを網棚に上げる。

通路の向かいの席には20歳代のカップルが座っていた　しばらく車窓を見てから

新聞を開く各駅もたまにはいいか・・・(新聞をひと通り読み終えヘッドフォンをした

途端に睡魔に襲われる・・・しばしまどろむ・・・新幹線は福島駅に到着した。

だいぶ長い間眠っていたように感じがした　予定では17時くらい

には会社に戻れそうだった。

郡山駅を出てしばらく車窓を眺める．．．トンネルに入る直前 車内のライトが一斉に消える．．．

「あれっ？どうした？」そう思った瞬間 新幹線が左右に大きく揺れた．．．

「やばい．．．」何かを考える間もなく身体が一瞬間に浮いてなすすべも無く．．．

身体が通路に叩きつけられる．．．「痛っ」左膝に激痛が走る。

（なに？なにが起こったんだ？．．．）

車両に女性の悲鳴が響き渡る．．．隣の席の男性は彼女に覆いかぶさって必死に何かから

彼女を守ろうとしていた。

新幹線は左右に振られながら徐々に減速して行きトンネル手前で停止した。

（地震．．．か？大きい．．．）直感的にそう思った。（どこだ

震源地は？．．．）

「東北地方で非常に大きな地震が発生した模様です．．．」

「詳しいことは現在確認中です．．．しばらくお待ちください．．．

」所掌の緊張した声が

車内に響き渡る。

皆 携帯を持ってデッキへ向かう．．．私も席を立とうとした瞬間に左膝に激痛が走る．．．

（いたっ．．．）先ほど飛ばされた時に痛めたらしい。

車両はトンネル手前で停止していた幸い携帯の電波はつながっている。

新幹線の中とはいえ今まで経験したことのない揺れだった 震度5強以上であることは

感覚的にわかった。14時50分過ぎ 皆デッキに出て携帯で連絡を取っているがつながらない．．．

泣いている女性も多にいる。

会社 夫 妻 家族 . . . 皆 愛する者の無事を確認したかった。
(東京は？大丈夫なのか？) 情報が全く入らない . . . 自宅に連絡するがつかない . . .

誰の携帯も . . . 鶴岡の実家も . . . (ダメだ . . .) メールで無事を送信する . . .

デッキのドアの窓から 空を見上げる 青い空にはなにもなかったかのように白い雲が浮かんでいる。

(彼女は . . . 柴咲亜美は？ 会社にいるのか？ 無事なのか？) 会社の携帯を握り締めて

何度も何度もリダイヤルする . . . (やはり . . . 無理か . . .)

つながらないまま時間だけが空しく過ぎていく . . . 携帯のバッテリー表示が半分になる . . . 早く ただ 彼女の声が聴きたくて . . .

リダイヤルを何度も 何度でも . . . でも つながらない。

どのくらい時間が経っただろう . . . バッテリーも残り少なくなっていた。

何度目のリダイヤルだろう . . . その時 呼び出し音が鳴る . . . つながった。

「堤です . . . 」

「堤部長？大丈夫ですか？」ランダムにリダイヤルしたので役員秘書室につながった。

「私は大丈夫です . . . 東京は 本社は大丈夫ですか？」
「はい . . . 今のところ大丈夫です」 秘書室の丹羽が答える . . .

「じゃあこの電話 . . . 」少しためらい . . . 「860番へ回してください . . . 」

「かしこまりました 少しお待ちください 転送します」丹羽の冷静な声に逆に緊張感が

伝わってくる . . . 860番は彼女の内線番号だった

「はい・・・柴咲です・・・」心細そうな声で彼女が応える・・・

「堤です・・・大丈夫？ 怪我とか？ 大丈夫？」

3・11 とホワイトデー

彼女は私の質問には1つも応えずに・・・

「堤部長？仙台でしょ？大丈夫なんですか？今どこにいるんですか？・・・」

涙声で・・・ 反対に質問してくる。

「私は・・・ 大丈夫だ・・・ 問題ない」電話の周りが騒がしい・・・

「堤部長なの？代わって！」アシスタントの天谷が代わる・・・

「堤部長・・・？今どちらですか？」

天谷に今後の対応を指示する・・・ 派遣社員を含めたスタッフの安全を最優先させて

早期帰宅などの指示を管理部門に委ねる。

「じゃあ部長も お気をつけて・・・」

「ああ・・・」結局 彼女と話せたのはお互い質問したことだけだった・・・

(でも無事で本当に良かった・・・ あっ 白謙のかまぼこ・・・ 今日は無理か・・・)

一先ず 彼女の無事も確認出来てホッとして席に戻る・・・ 皆不安そうな顔をして

携帯電話を見つめている・・・ 家からはその後連絡もなく・・・ 私はメールで無事を伝えた。

新幹線は全く動く気配がなく時間だけが空しく過ぎていった・・・

30分ほどして車掌が やってきた。

「お客様には大変申し訳ございません・・・ 現在復旧の見込みなく 情報も少ない状況です・・・

現在バッテリーを使用して照明空調を動かしていますが、バッテリー保持のためすべて

をOFFにしなければなりません．．．どうかご理解ください．．．

そう言つて車掌は深く頭を下げた。

（これだけ大きな地震が起こったんだ．．．誰も車掌を責めたりしない．．．）文句を言うもの

は誰もいなかった．．．（私も含め東北人は忍耐強いのだ．．．）
車内の電源が落ちた．．．

「皆様．．．室温保持のためサンシェードを下ろしてください．．．
」そこから長い長い

夜が更けていった。おそろく　ここは那須高原の手前だと思われた．
．．．まだ3月．．．夜になる

と気温がどんどん下がってくる。（もしかすると．．．新幹線の中
で1泊ということも．．．）

そう思い売店へ向かう．．．お茶などの飲み物はすべて売り切れて
いた。

「コーヒート．．．これ1つください．．．」非常食にと「薄皮饅
頭」を1箱買う。

サンシェードを下ろし薄暗くなった車内．．．静寂な時間だけが流
れていった。

目を閉じる自然と　彼女の顔が目には浮かんでくる．．．face b
ookでのやり取りは2ヶ月に
なるうとしていた。

ドラマティックな出来事など望まず　今まで　平凡を生きてきた．
．　彼女との出逢いを

境にして　壊れかけていた私の心は何とか持ち堪えていた。

私は彼女に感謝していた．．．その一方で　なぜ　彼女ともっと
早くにめぐり合えなかったの

だろう．．．と思ったりもする。日が陰り窓からは漆黒の闇が支配し
ていた．．．冷えた空気が

車内を覆っていく。

私は東京を出発する時の暖かさからスーツにマフラーだけの軽装だった．．．寒くてとても

眠れない．．．携帯で時間を見る22時23分（もうすぐ．．．8時間か．．．）

緊張感で空腹感はない．．．また目を閉じるところからか赤ちゃんの鳴き声が聞こえてきた。

しばらくしてトイレに行く．．．車内を携帯電話の光だけで進む．．．

トイレには長蛇の列．．．もうこれ以上 新幹線の車内にいるのは困難に思えた．．．

時計が深夜0時を回った時．．．サンシェードの隙間から光が漏れてくる．．．

ヘッドライトをしたJR職員が線路脇にライトを立てていく（助かった．．．）

もう限界だった．．．しばらくして車掌が来てバスで那須高原まで搬送する準備が

出来たことを告げた。順番が来てハシゴで新幹線から線路脇に降りる．．．

10mくらいの間隔で照らされた非常用ライトは幻想的だった．．．ライトに沿って一列になって線路脇を歩く．．．数百メートル歩くと遠くにバスの

ヘッドライトが見えた。

バスを待つ間 夜空を見上げる．．．雪が舞っている雲の間から無数に煌く星が見える

「ハア〜」吐く息が白い。（無事に家に帰れたのかな？）誰よりも彼女のことを想う

．．．携帯メールの着信表示があった．．．家からだった「いまだどこ？今日帰ってくるの？」

と一行書いてあるだけだった．．．

バスの中でメールを返信する．．．外で20分ほどバスを待つていたせいで指先が悴んで

感覚がない．．．ヘッドライトに照らされる舞い降る白い雪．．．バスが真つ暗な闇の中を進む

．．．皆 不安そうな顔で窓の外を見つめていた。バスは避難所としてJ Rが用意した

那須高原のHOTELへ向かっていた．．．

50分ほど走ったであろうか那須高原のHOTELに到着する雪が降り続き辺りは一面の

銀世界に変わっていた．．．HOTELから明かりがもれる 幸いここは停電していないよう

だった。

HOTELに入ると温かいお茶とおにぎりが配られる 本当にありがたい。

時計は午前2時30分を過ぎている．．．皆 疲れているが余震で緊急地震速報の

アラームが鳴り響く．．．

余震の恐怖と極限状態の不安で誰一人眠る人はいなかった。

電源が確保出来てP Cと携帯を充電する．．．P Cでfaceboo kを開く．．．

彼女からの書き込みはない。

アルバムの写真を見る．．．寂しくて 心細くて 皆 愛する人に逢いたいそう思っていた。

書き込みをするく今 那須高原のHOTELに避難しています．．．大丈夫ですか？家には

帰れましたか？心配しています>窓から外を見ると 雪が降り積もっている。

彼女への想いは降り止まぬ雪のように募っていった．．．追いかけても辛いだけの恋を

する覚悟が私にあるのか？自問していた．．．ロビーのTVか

ら映像が流れる

思わず自分の目を疑いたくなる様な津波の映像　．．．街を焼き尽くす炎．．．

（これが現実なのか？）誰もが信じられない．．．信じたくないという表情で画面を

食い入るように見つめていた。石巻から東京へ向かっていた親子がタオルで顔を覆い

咽び泣いていた．．．その光景を見て皆　泣いていた．．．私も一緒に泣いていた。

その場を離れてエントランスに降りて行く．．．

那須高原は昨晩から降り積もった雪に朝日が反射して美しかった。

TVの画像を見て私も一歩間違えれば命を失っていたのではないか？と思った．．．

私も数十時間前　今津波に飲み込まれた街にいたのだから．．．

仙台支店のスタッフ

から全員無事のメールが入る（よかった．．．）

どのくらいの被害者が出るのだろうか？阪神淡路大震災のことが思い起された。

私はこうして生きている　いや．．．生かされている　思えば今までずっと走り続けてきた

結婚して子供もふたり授かった．．．それからは家族のために家族を守るためだけに

必死で．．．どうして？どうしてこうなってしまったのだろう．．．

いくら考えても答えなど出てこなかった．．．

こうして生かされているのであれば．．．自分に偽りのない人生を歩んでいこう　そう思った。

那須塩原市の指示でHOTELに分散されていた乗客をスポーツセンターに集めることになった。

バスでスポーツセンターへ移動する　深夜全く見えなかった街並

みが車窓から見える．．．

避暑地だけあって別荘らしき建物が並んでいた。

バスは30分ほど走りスポーツセンターへ到着する。

スポーツセンターでJR宇都宮線の復旧を待つ．．．東京へ戻る者はまだ幸せだった。

乗客の中には石巻 気仙沼 岩手県からの人たちも多く東北方面の交通機関は全てが不通で

帰れる見込みなどなかった。JRから15時くらいに宇都宮線が復旧する見通しという

説明があった。(やっと．．．帰れる．．．)

冬の嵐が過ぎ去った那須高原を写真に収める．．．1時間ほどバスに揺られて宇都宮駅に到着する。

まだ完全復旧していないため上野からの折り返し電車を待つ間facebook を開く．．．

彼女からの書き込みはなかった。

ニュースでは首都圏の帰宅難民が数百万人にのぼったと伝えていた

(彼女の自宅は鎌倉．．．歩いて帰れる距離ではなかった。

(昨日は会社に泊まったのか?) facebook で彼女のウォールに書き込む．．．

<大丈夫ですか? 家には帰れましたか?>

(また電報みたいになってしまった．．．な)

<私は宇都宮駅に着きました これから宇都宮線で大宮に移動します>

20分ほどして上野からの折り返し電車が到着する．．．電車のシートに座る．．．

安堵のため息が出る．．．電車は上野へ向け走り出した。

通常の倍以上の時間を要し大宮駅に着く．．．埼京線に乗り換え池袋へ

土曜日だというのに店はシャッターを閉じ 街は静まり返っていた。

家に着いたのは23時を回っていた「ただいま・・・」「いつもと変わらず返事はない・・・」

そのまま2階へ上がりシャワーを浴びる・・・こうして今までで一番長かった

2日間が終わろうとしていた。

月曜日は出社出来るのか？PCで交通機関の情報を見る・・・JR

私鉄 東京メトロ

相当の規制があるようだった。

facebookに彼女からの返信が着ていた。

<堤部長 ご無事で本当に良かったです。那須高原に避難していたんですね・・・

もうご自宅ですか？東京もすごく揺れて・・・オフィスの中もとても怖かったです・・・

金曜日は品川の友達の家泊してもらいました。土曜日には鎌倉に帰れました。

ご心配して頂きありがとうございます。>よかった・・・本当に彼女の無事を確認出来て安堵する。

彼女へのお土産『石巻 白謙のかまぼこ』は避難所で分け合った（彼女へは また今度・・・）

そう思っていると・・・石巻の壊滅的な街の様子がTVに映し出される・・・時間が経つにつれ

被害の大きさに愕然とする。

3月14日月曜日・・・ホワイトデー・・・朝6時駅に着く・・・

・シャッターが閉まっている。

（やはり 無理か？）携帯で情報を見る・・・

バスで東武線に乗り池袋に出るのが唯一の手段だった・・・乗れないバスに揺られ

いつもの倍以上の時間がかかって何とか会社へ辿り着く・・・スターバックスは開いていない・・・（店長は大丈夫だったのか？）

デスクに着く・・・

オフィスには人影がない。

デスクには決済待ちの書類が散乱していた．．． チェックを入れる．．．8時過ぎアシスタント

の天谷が出社してきた。

「堤部長！大丈夫でした？」

「新幹線の中だったんですよね？何時間閉じ込められていたんですか？」矢継ぎ早に

質問をしてくる．．．

彼女はまだ出社していない．．．朝のミーティングで計画停電により遠方の出社は控えると

いった指示が管理部門から出された。鎌倉も対象に入っていた．．．

10時過ぎ：部長以上の緊急ミーティングが入る。ミーティングは昼過ぎまで続き今後

1週間の各支店のシフトが決定した。仙台支店は1週間の閉鎖と決まった．．．

部下が心配だった．．．デスクに戻り仙台支店の部下に連絡するが電話は通じない．．．

仕方なくメールと伝言を残す。

しばらくして仙台支店から連絡が入り全員の無事を確認し1週間の支店閉鎖が伝えられる。

彼女のデスクに目を向ける．．．（やはり今日は無理か．．．）
14日以降の出張はすべてキャンセルになり終日ミーティングが入り就業時間も1週間

15時までと決まった。時計は14時30分を過ぎていた．．．
その間もNEWSで被災地の映像

が流れる．．．被害の大きさに皆愕然とし言葉を失う．．．
避難所で一緒に過ごした

石巻の親子のことを思い出す。

15時過ぎ会社を出る：計画停電で帰りも東武線とバスを使うしか

なかった．．．

（ 家に早く帰っても．．． ）西武線は練馬高野台までの折り返し運転だった

（ 2 駅か．．．歩けるな．．． ）西武線に乗る．．．練馬高野台の駅は通勤客で混雑していた．．．

方向音痴の私は皆の後について行く．．．

石神井公園駅には15分ほどで着く．．．（案外近かったな．．．

）

そう思って大泉学園のタワーマンションを目指し歩く．．．直線距離は数キロなのだが．．．

道が入り組んで同じ道を回っているように錯覚する．．．15分．．．20分時間は過ぎていく

が全く駅に近づかない 人通りも疎らになっていく少し心細くなってきた頃やつと

知っている道に出る．．．

（ダメだ．．．明日はやはりバスにしよう．．．）日頃の運動不足が祟って左膝が痛くなってきた。

結局1 時間以上かかって家に着く．．．風呂に入り左膝にシツプを貼ってベッドに入る。

（少し身体も鍛えなおさないと．．．）

次の日また次の日も計画停電による交通制限が続く．．．相変わらず西武線は練馬高野台

からの折り返し運転だった。迷わず東武線へのバスに乗る．．．

（これ いつまで続くんだ？ ）8時過ぎに品川駅に着く．．．皆 疲れが顔に滲み出ている．．．

スタバでイングリッシュマフィンソーセージをオーダーする．．．

「堤さん珍しいですね〜マフィンなんて．．．」バリスタの女性が話しかけてくる

「ちよつと気分転換に．．．そういえば店長は？」「店長のご実家が仙台で．．．」

「そう．．．」 タンブラーにコーヒーをもらってデスクへ向かう。まだ出社している社員は少なかった．．． オフィスには彼女の姿もまだ見えなかった。

震災の後 私にとつて彼女は かけがえのない存在になっていた。オフィスに人が入って

くるたび視線を向ける．．． やはり彼女は来ない．．． 9 時過ぎミーティングが始まる．．．

午後のミーティング前 コンプライアンス部門のマネージャーに訊いてみる．．．

「派遣社員はまだ自宅待機になってるの？」

「いえ．．． 原則 出社指示を出していますが．．． 何か？」

「．．． いや 問題ない．．．」 鎌倉からの J R 線も動いている．．．（何かあつたのか？）

また勝手な心配をしてしまう．．． しかし 彼女の電話番号も．．． メールアドレスも知らない．．．

彼女との距離が近くなればなるほど．．． もどかしい．．．

facebook だけが彼女と私をつないでいる．．． 現実 もどかしさを抱え彼女の

ウォールに書き込む。

< 計画停電でバスを乗り継いで 毎日出社しています 大変です．．． 出張のスケジュールも

すべてキャンセルになりました。鎌倉は大丈夫ですか？体調 崩したりしていませんか？>

結局 彼女は 18 日も出社して来なかった．．． 返信もない。

返信がなくてもまた facebook に書き込む。

< 震災の当日．．． 私はお土産に 石巻 白謙の「笹かまぼこ」をお土産にしていました．．．

あの日帰れなくなって．．． 避難所において皆で分けて食べました．．． また 仙台に出張する時

には白謙の「笹かまぼこ」お土産にしますね > 彼女からの返信は

来なかった。

逢いたい想いのまま．．． 逢えない時間だけが過ぎていく．．．

日曜の夜 PC を開く．．．

彼女からの返信はない．．． 次の日．．． 西武線 JRもまだ
通常ダイヤには戻らない。

いつもより30分早く家を出る．．． 桜は三分咲きくらいだろうか
？朝のミーティングを終え

デスクに戻る：彼女の席の方へ視線を向ける（今日も休みか．．．）
出張もキャンセルになり

17 時30 分 会社を出る。

スカイウェイを渡って品川駅へ向かう．．．（鎌倉へ行ってみよう
．．．）

15番線ホームに下りて行く横須賀線 久里浜行きの電車に乗り込
む．．． 家とは全く反対の

方向へ電車は動き出す．．． 見慣れない風景が車窓から見えたく
る。

（．．． また何やってんだ．．．俺は．．．） 電車はどんどんス
ピードを上げていく．．．

鎌倉に行っても彼女に逢えるはずもない．．． 鎌倉駅のかもわか
らない．．．でも彼女のことを

想う気持ちが鎌倉へ向かわせていた。 横浜駅で多くの乗客が降りて
いく．．．

（引き返そう．．．） そう思う気持ちと裏腹に身体は車内から降り
ようとはしなかった。

ドアが閉まり電車は静かに動き出す．．．
横浜を過ぎるとはじめて見る風景が広がっていく．．． 丘陵にひ

しめきあつ住宅地

そして工場群 大船駅を過ぎた辺りからは一段と山が近くなり線路
脇にも木々が生い茂っている。

北鎌倉．．． 木々の隙間から閑静な住宅が見えてくる．．．

彼女は毎日この風景を見ているのだろうか？ まもなくして電車は鎌倉駅のホームへ入っていく。

久しぶりに降り立つ鎌倉駅のホーム．．．結婚前に鎌倉にデートに来て以来だった。

人影は疎らでホームから改札へ降りていく人波の後を歩く 改札を出るとロータリーに

バスが数台停まっている 左側には赤い鳥居が見える．．．ロータリーに沿って鳥居の方

に歩いてみる．．．観光地らしく土産店が軒を連ねているがほとんどがシャッターを

下ろしていた。

振り返ると鎌倉駅の三角屋根と時計台が見える しばらく駅前に佇み行き交う人を

眺めていた．．．彼女に逢えるはずもないのに。

（こんな時に．．．俺は何やってんだ．．．）自分を責める 日が暮れた鎌倉駅のホームで

電車を待つ．．．JRはいつもの60%で運行していた なかなか電車は来なかった。

彼女にもう逢えないんじゃないか．．．そんな不安が頭を過ぎる 東京方面行きの電車の中

は数人の乗客しかいなかった．．．真っ暗な鎌倉の街が遠ざかっていく。

「はあ〜」ため息が出る．．．車窓に映る自分の顔を見つめてまた自分自身を責める．．．

彼女に逢えたくても逢えない 寂しさは彼女への想いをいつそう強くしていく。

23時過ぎ自宅へ着く．．．シャワーを浴びてfacebookを開くと待っていた彼女からの

書き込みがあった。

<堤部長 ご心配おかけしてごめんなさい（。 -人 -。） 震災

後少し体調崩しちゃって

でも もう大丈夫です (。|∧) イエー 出張キャンセルになつたのなら少し休んでください

ではまた明日 おやすみなさいzzzz>

(体調・・・か 明日逢える・・・) 彼女に逢えなかつた10日間は途方もなく長く感じた・・・

これが・・・長い間 麻痺していた 寂しいという感情なのか・・・

朝デスクでコーヒーを飲んでいると彼女の声が聴こえてくる・・・

「おはようございます」

自然に彼女の方に視線がいく・・・

(あつ・・・髪切つたんだ) 彼女がこちらに近づいてくる・・・

「堤部長 ご心配お掛けしました」そう言つて頭を下げて 左耳に髪をかける

(あつピアス・・・) 「あつああ大丈夫？」

「はいつ・・・もう大丈夫です」彼女は笑顔でそう答えると自分のデスクに戻つていった。

(少し痩せたかな?) 前と変わらず元気そうに見えたが どころなく寂しそうに思えた

(気のせいか・・・) 「おはよう ございます」他のスタッフがオフィスに入ってくる。

彼女は黙々とPCに向かつて仕事をしている様子だった・・・その時 彼女に何が起こつて

いるのか? 私は知る由もなかつた。

震災後 東日本の物流システムについてのミーティングは昼を過ぎても終わらなかつた・・・

デスクに戻つたのは13時30分を回っていた。開いていた近くの定食屋で昼食

を済ませて日本橋 三越へ向かう・・・ 彼女へのホワイトデイ・・・
まだ渡せていなかったから。

JRと地下鉄を乗り継いで日本橋 三越の地下1階・・・「ピエール・エルメ・パリ」に着く。

カラフルなマカロンがショーケースにならんでいる・・・「ご進物ですか？」

若い店員が訊いてくる・・・「ご進物： には違いないのだが・・・

「店員が少し困った顔をする・・・

結局 ホワイトディとは言えず・・・ 8個入りのかわいい箱に入ったものを選ぶ

(マズイ・・・ 時間がない) 15時から来客があった。急いで会社に戻る・・・

デスクに着くと誰もいないのを見計らって冷蔵庫にマカロンを入れる 急いで来客用

ラウンジへ向かう。

(マカロン・・・ いつ渡そうか?・・・) 来客の後2つのミーティングを終えてデスクに戻る・・・

時計は17 時20分を過ぎていた。休んでいた分の仕事が溜まっているのか?

彼女にはいつこうに帰る気配がなく・・・ 忙しそうにフロア1を動き回っている・・・

18 時を過ぎオフィスには数人しか残っていないかった・・・ 彼女は電話でクレーム対応をしているようだった。

私は思い切って彼女のデスクに近づいていった・・・ 「何か問題でも？」

「いえ 大丈夫です・・・あと10分くらいで処理出来ますから」 彼女は笑顔で答える。

(今しかない・・・) そう思って彼女に告げる・・・ 「ちょっと待っていて・・・」

冷蔵庫へ向かい 真っ白な手提げ袋に入ったマカロンを取り出し急いで彼女の元へ戻る・・・

「これ．．．」彼女にマカロンを手渡す．．．「ホワイトデー．．．もう過ぎちゃったけど．．．」

14 日渡せなかったから．．．」

「えっ．．．私に？ いいんですか？」こちらを見つめる彼女．．．
（少し．．．目が潤んでいる？．．．気のせいか？）「私．．．」

「ん？」

何かを言いかけてから．．．「ありがとうございます．．．」
そう言って手提げ袋を受け取った。心臓の鼓動が早くなる．．．
デスクに戻ってPCを見つめて平常心を装う．．．

「堤部長．．．お疲れ様でした．．．」しばらくすると．．．
彼女はオフィスを

出て帰っていった。「ハア」大きな安堵のため息をついた。震災から2週間が

経ち福島原子力発電所の事故は深刻な状況を脱していなかった．．．

そんな中 来週から震災後初の札幌 小樽への出張スケジュールが
組まれていた。

私もしばらくして会社を出る．．．どうしてもこのまま帰りたくな
かった。

駅近くのイングリッシュ パブに入りビールとフィッシュ&チップ
スを注文する．．．

「部長！ 堤部長お！」後ろから肩を叩かれる．．．アシスタント
の天谷だった。

「おう．．．ひとりか？」「はい．．．」天谷はすでに3杯目のビ
ールだった．．．

向上心の強い天谷は次々と痛いところを突いてくる．．．
「あっそうそう．．．震災後 派遣社員 結構休んじゃって．．．」

ソフト組むの大変だったんですよ！ コンプラは暇でいいですけど

ね」

(コンプラ．．．彼女の．．．)

「確かあ 柴咲さんも1 週間お休みでしたよね〜彼女 バツイチだから大変なんでしょうね」

「．．．バツイチ．．．」そう言って4 杯目のビールを注文する．．． (離婚．．．?)

5 杯目で何とか天谷を帰し私も帰る．．． 時計は22時を過ぎていた。

シャワーを浴びて．．． 深夜0 時過ぎface bookを開くと彼女からの書き込みが．．．

<わあ〜 マカロン大好きです ありがとうございます!!*
^-^*!! ホワイトデイ．．．

すっかり忘れていました．．． 今夜 紅茶と一緒に頂きました
堤部長つて意外と．．．

かわいいもの選ぶんですね >
写真にはティカップとマカロンが写っていた

<まだ寒い日もありますが、鎌倉の桜も咲き始めました。

鶴岡八幡宮 段葛の桜並木は とてもキレイで私の大好きな場所です (o^_^)(b >

(．．．花見かあ．．．)
返信する<マカロン 私も大好きです 鎌倉の桜はさぞかしキレイ

いなんだろうな〜
つて思います。桜を見ると故郷を思い出します．．． 仕事あまり

無理しないで>
(。．．．．。；)

彼女からすぐ返信が来た．．． (まだ 起きてたんだ．．．)
<堤部長つて．．． どんなお子さんだったんだろう? 私は．．．

すごくお転婆で．．．
(今でも．．．)テへ(*。ー) < 小学生の頃は 男の子をよ

く泣かしてました

”（ノヘ＼*）”（ウウ… あの頃に戻りたいなあ >
< 私は… 山や川で毎日夕方まで遊んで帰る ガキ大将？か
なあ >

< ああ何だかそんなイメージありますよね 堤部長のことだからみ
んなをいざという

時守ってくれる 頼もしくて 優しいガキ大将だったんでしょ

その頃の

堤部長に逢ってみたいなあ > <… だろう？でも毎日楽しかった
な >

お互い逢えなかった時間を埋めるように…ふたりは深夜face b
ookで想いを綴っていく…

< お（^ ^）（や）（o）（す）（o）（みい）（-）（o）
o >

今日は午後から都内での打ち合わせで世田谷に直行していた…

打ち合わせと

商談を終え品川駅に着いたのは18時30分を過ぎだった…

「あつ…」

駅からスカイウェイを歩いていると品川駅に向かう 彼女とすれ違
う…

一瞬 声を掛けようとする…

人ごみの中 彼女は気がつかない…諦めて会社へ向かうが…
何を思ったか

反転して彼女を追う… 品川駅へと流れる人波から彼女を探
す。

そして会社へ連絡を入れる… 「堤です…今日は 世田谷
から直帰します…」

（どこだ？）人波に消えた 彼女は見つからない…
駅の人込みをかき分けて進む… 「あつ…」彼女の後ろ姿
が目に飛び込んでくる…

ネイビーブルーのコートにダークブラウンのブーツ…

オレンジ色っぽい

シヨルダーバックを持っている。(何て…声を掛けようか…)

彼女に近づくと改札へと流れていく人波に…また離される。

そして そのまま 改札を抜けてしまふ… 彼女は横須賀線の

15 番線ホームへと

降りていく… どんどん引き離されていく距離… オレン

ジのシヨルダーバックを探すが

横須賀線のホームで完全に彼女を見失ってしまう。

並んでいる列を見ても彼女の姿はなかった… 久里浜行きの電車がホームに入ってくる。

諦めかけて振り返ったその時 7 号車の真ん中のドアにネイビーブルーのコート姿の

彼女が目飛び込んでくる… 彼女は電車に… 乗ろうとしていた…

無意識に私も同じ車両の隣のドアから乗る… ドアが閉まる… 私はドアの向こう側を見つめる…

ドアに自分の顔が映る。

(ホント 何… やってんだ… 俺は…)

電車はスピードを上げる… 西大井駅を過ぎ住宅街と倉庫が連なる中をひた走る…

(同じ車両に彼女が乗ってる… ゆっくり後ろを向き車両の真ん中に目をやる…)

乗客が多くて彼女らしき人は見えない… 武蔵小杉の高層マンション群が近づいてくる。

武蔵小杉の駅に停車すると大勢の乗客が降りる… 車内をもう一度見渡す…

「あ… いた…」 すぐに窓に目をやる… (どうしよう…)

もう声をかけるタイミングではなかった… 心臓の鼓動が急に

早くなる．．．

彼女はドアの脇に立って窓からじつと外を見つめている．．．（．．．
．．．なんで？）

車内のライトに照らされた彼女の横顔は 会社では見たことがない
．．．

悲しみの表情をしている。会社では見せない彼女の表情を見て
当方もない罪悪感が湧き出る。

見てはいけない 彼女を見てしまった気がして心が痛かった．．．（
やはり．．．こんなこと．．．しちゃいけなかったんだ）視線を落と
す。

電車は横浜駅に近づいていた 車窓からランドマーク タワーが見
えてきた。

（横浜駅で戻ろう．．．）そう思った時、彼女がバックからスマー
トフォンを取り出す．．．

真剣な表情で 画面を見ている．．．（エッフェル塔？）赤のスト
ラップが揺れている。

電車は横浜駅のホームへ入って行く．．．ドアが開く（えっ．．．
降りるの？鎌倉じゃ．．．）

私も急いでホームへ降りるが 人が多くて 彼女の姿はホームには
なかった．．．

階段で下に降りる．．．人波に任せ中央改札口へ．．．もう一度
ホームの方へ戻る．．．

もうこの中から彼女を探すのは不可能だった。中央口から改札を抜
ける（．．．．．帰ろう）

東海道線のホームに立ち東京行き電車を待つ．．．
（馬鹿なことをした．．．本当に馬鹿なことを．．．）ひたすら自

分を責め続ける。
電車が入ってくる．．．東京行きの車窓に映る自分の顔を見ながら
．．．

．．．また責める。

心が痛む．．． ただ彼女のそばに．．．それだけだった。

次の日．．．震災も少しずつではあるが落ち着きを取り戻しつつあった。

デスクでぼんやり PCを見つめていると．．．「おはようございます」

いつものように彼女が入ってくる．．．彼女の顔を真面に見ることができない．．．

こんな日に限ってミーティングは1件もなかった．．．

こんなに一日中デスクにいるのが苦痛な日はなかった．．．

（横浜駅でもし．．．彼女が降りていなかったら．．．どうしてた？．．．）

自問自答するが答えなど見つからない．．．（まるで．．．高校生じゃないか．．．）

facebook 言葉と言葉から伝わって．．．つながった ふたり 心と心がつながるには

まだ時間が必要だった．．．
幸い？明日から信州松本への1泊2日の出張スケジュールが組まれていた。

震災で東日本への出張はまだ自粛されたままだった。彼女の顔を見るのもまだ

少し心が痛み．．．不自然に彼女のことを避けていたかも知れない．．．

いつもの様に自宅で明日からの出張の身支度をする．．．

23時過ぎ．．．PCを開く．．．彼女からの書き込みだ．．．

もうお休みになりましたか？

明日から松本へご出張ですね 堤部長 何かありました？なん

だか 変ですよ

いつもと違って．．．（ つ ）ムウ すみません．．．余計な

お世話ですよね．．．

ご出張 お気をつけて

（．．．やっぱり．．．気づかれていた．．．）返信を書き込

む . . .

<どこか変でしたか? . . . いつもと同じ . . . 少し疲れているから . . . >

またうそをついた . . . (くだけた言葉の方がわかってもらえるかな . . .)

書いては消してまた書いて . . . それはまるで . . .

高校生がラブレターを書くようだった . . .

午前0 時を回った頃やっと返信する . . .

<ありがとう 心配してくれて でも 大丈夫 問題ない (

* ^ . .) v >

(なにが問題ない . . . だ . . .) ベッドに入る。

翌朝 特急あずさ7 号で松本へ向かう . . . 駅へ向かう満開の桜並木も見頃を迎えていた。

山裾を走る電車に揺られながらいろいろなことが頭をよぎる . . .

転勤 転職 これからの自分 . . . そして彼女のこと。昼前 松本駅に到着する . . .

クライアントのオフィスのある松本城近くまで . . . 歩いていく。

東京と比べて空気が澄んでいて気持ち良い . . . 桜は5分咲といったところか。

商店街を抜けると通称「烏城」と呼ばれる黒壁の松本城が見えてくる . . .

止まらぬ想い・・・鎌倉へ

程なくして目的のクライアントの元へ到着する。

お昼をご一緒して午後からミーティングと商談を行う・・・問題ない 交渉は順調だ。

今晚の宿は浅間温泉を予約していた・・・普段は普通のビジネスHOTELなのだが・・・
いろいろ考え事がある時はいつも温泉に浸かって考える。

18時・・・タクシーで宿に向かい 少し早いチェックインする。

少し贅沢して人気の宿を予約していた・・・イメージしていたのと違い驚く・・・

天井の高いロビーは独特な空間を作り出していた・・・部屋に案内され 食事前にまず

風呂に浸かる・・・(ちょっと贅沢だったかな・・・) 食事は信州の旬の食材を使った

懐石料理・・・写真を1枚・・・(やっぱり少し贅沢・・・) まだシーズンには早く震災の影響もあり通勤客の姿も少なかった。

贅沢な食事を堪能した後 露天風呂に入る・・・湯船にゆっくりと浸かり春の風を

感じながら想う・・・(この先・・・どうすれば・・・)

風呂に何時間浸かろうと・・・ゴールなど見えるはずもなかった。夜空を見上げてつぶやく・・・「これからは 自分の心に偽りのない人生を・・・」

翌朝 久しく食べていない和食の朝食を平らげ・・・午後からのミーティングに間に合う様に

9時54分発のあずさ12号の指定席を取ってあった。タクシーで 松本駅へ向かい

駅構内のショップで「野沢菜」を買い求める。 松本駅内のスタバでコーヒーを

飲みながらfacebook に書き込む...

<昨日は浅間温泉の 貴祥庵という旅館に泊まりました(出張ですよ...)>

久しぶりに温泉に浸かり...料理もすごく美味しくて(出張です)でもひとり旅って

(出張)美味しいもの食べても「これ おいしいね」って言いな

いんだなって。(当たり前だけど...)写真撮ったから送ります (´・ω´)>

<「野沢菜」買ったのでお土産に持って帰ります 午後からミー

ティングなので...会社の冷蔵庫に入れておきます 目印は...

赤い輪ゴムです。忘れずに持って帰ってください(´・ω´)ノ

>PCを閉じて駅の改札を抜けてあずさ に乗り込む。

「あつ...雨か...」八王子を過ぎた辺りで雨が降ってきた...

・ 昨晩は2回 今朝1回温泉に入った效能か?身体が軽く感じる...

・ 午後の資料をチェックする。

予定通り12 時30 分過ぎ あずさは新宿駅に到着する...

朝食を食べ過ぎたせいでお腹は空いていなかった...

(そのまま...オフィスに 戻るか...)山手線に乗り換える...

雨は本降りになっていた。コーヒーをテイクアウトしてデスクに戻る...

「ふうう...」部長 お疲れ様です!

この前は...もしかして?ごちそうさまでした...「天谷

がやってきた。

「私...酔っぱらっちゃって...なにも覚えてなくて...

私...変なこと...言ってますでした?」

「変なこと?って...」「いえ...言ってなかったら...

いいんです 失礼します」

「...」

コーヒーを飲む... (あつ 野沢菜...)バックから野沢菜

を出して赤い輪ゴムで結ぶ…。そして冷蔵庫に入れておく。
彼女のデスクに視線を向ける…。コンプラのスタッフは誰もいなかった。

コンプラのスケジュールは15時まで全体ミーティングになっていた。

私は15時からミーティング…。すれ違いだった。

デスクでPCを開くと彼女からの返信があつた…。< >へ

温泉 美味しそうな懐石料理 見ましたよ！本当に出張
なんですか？なんてね いいなあ温泉

少しは疲れ取れましたか？ 野沢菜あり
ありがとうございます

忘れないように持って帰りますv(*・-・^*) - >

(疲れ取れましたか？…。か)彼女になにもかも見透かされている
様で少し恥ずかしかった…。私の心の声も 彼女には届いている
のかも知れない そう思えた。

15時…私もコーヒーを片手にミーティングルームへ急ぐ ミーテ
ィングの後 来客が

2件入り デスクに戻ってこれたのは 18時を過ぎたころだった
…

リフレッシュルームの冷蔵庫からミネラルウォーターを1本取
り出す…。野沢菜はなくなっていた。 (よかつた 持
って帰ってくれたんだ…)。

デスクに戻りメールのチェックをする…。温泉で少しほぐれた肩
は パンパンに張っていた。気分転換にスタバに行く…。エレ
ベーターホールに降りると目の前に彼女がエントランスに向かって
歩いていた 声を掛けようか一瞬ためらう…。

彼女はベージュのスプリングコート…。手には水玉模様の傘を持
っていた…。私は彼女の後について行く… もう誰の制止する
声も今の私には届かなかつた… 帰宅する人で溢れている品川駅
自由通路… かるうじて彼女の後姿を見ていられたが…。すぐに

人影で見失ってしまう．．．改札口へ急ぎ彼女を探すが見つけられない．．．「あっ．．．」私の3人ほど隔てた先に ベージユのスプリングコート姿の彼女が歩いてきた．．．（髪．．．が．．．）雨が降っていたせいなのか？いつの間にか 彼女の髪は水色のシユシユで結ばれていた．．．（危うく追い越しそうだった．．．）彼女は改札を抜けて周りよりゆっくりとした速度で15番線ホームへと降りて行った。

しばらくして 久里浜行きの電車がホームへ入ってくる．．．人込みの中で彼女が乗ったのを見て私も隣のドアから乗り込む．．．車内は思いの外 混雑している．．．彼女が乗った方向を見る。（水色のシユシユ．．．）（あっ．．．）彼女はこの前のようにドア近くに立ってぼんやり 窓の外を見ていた．．．

少しだけ見慣れた街並み．．．久里浜行きの電車は倉庫街 住宅街を抜け横浜駅に近づく．．．横浜駅．．．（降りるの？）ホームに入る電車．．．緊張が走る．．．彼女はドア近くに立ち外を眺めていた．．．降りる気配はないドアが閉まり 電車は横浜駅を出て走り出す。車内は乗客が半分ほどに減っていた．．．彼女はシヨルダーバックからスマートフォンを取り出す．．．赤いエツフェル塔のストラップが揺れている。車窓からは広がる住宅街の煌く灯りが見えてくる．．．

彼女はスマートフォンで何かを検索している様子だった．．．私の視界には彼女以外入っていないかった。

電車は大船駅に近づく．．．地図上では大船駅も鎌倉市．．．彼女がどの駅で降りるのか？

ホームに近づくと緊張感が走った．．．電車は彼女を乗せたまま大船駅を出る．．．次は北鎌倉駅．．．数名の乗客が降りて行ったが 彼女は相変わらずスマートフォンを覗き込んでいた．．．トンネルを抜けて鎌倉駅到着のアナウンスが流れる。

彼女はスマートフォンをバックの中に仕舞う。（鎌倉駅で．．．降りるのか？）

電車は鎌倉駅ホームに滑り込む．．． ドアが開き乗客が大勢降りて行く 彼女も最後に降りてホームに出たのを見て私も降りる．．．
(えっ．．． まずい．．．) ホームに降りると右側から彼女が私に向かつて近づいてくる．．． 私は出口の階段に近い方に降りてしまっていた。

彼女に背を向けて少し歩いて 自動販売機の脇に立ち止まって彼女をやり過ごす．．．

「ふう〜．．．」危うく彼女と鉢合わせするところだった。

やり過ごしたはずの彼女をまた見失ってしまう．．． (まずい．．． どこ．．．どこに?)

人波は改札に向かって流れ消えて行った。

(あつ水色の．．． シュシュ．．．) 改札を抜ける寸前の彼女を見つめる．．． 私も急いで改札を抜ける 改札を出たところで彼女は空を見上げる．．．

雨上がりの澄んだ夜空には無数の星が瞬いていた。

彼女は左手にゆっくり歩き出す．．． (バスじゃないのか?)

バス停の脇を通り過ぎ 細い路地へと入って行く．．． 4、5名が同じ方向を歩いている．．． (どこに行くんだ?) そう思った時建物が見えてきた．．． (．．． 駐輪場．．． か) 彼女は慣れた様子で駐輪場へ入って行く．．． 私は少し離れた場所で待つ．．．

(まさか．．． 自転車．．． か) 駐輪場から自転車に乗った人が走り去っていくのが見える(あつ．．．) 赤いフレームの自転車に乗った彼女が駐輪場を出てゆっくりと鎌倉駅の方へ

戻っていく．．． 自転車はロータリーを四分の一周して商店街の前を通り過ぎ鎌倉駅入り口交差点で停まった。

私も小走りで彼女を追いかける．．． (自転車か?) 交差点の信号が青に変わり彼女の乗った赤いフレームの自転車は右折しどんどんスピードを上げていく．．．

私は彼女の自転車を追って 走る．．． 全力で走る．．． 自分で

も想像しなかつた行動だつた．．．追いつかないとわかつていても 彼女を夢中で追いかけていた．．．10m 20m 30m．．．50m．．．左膝が悲鳴を上げる。彼女はどんどん遠ざかる．．．息があがり苦しい．．．「ハアハア．．．ハア．．．」呼吸の音だけが聴こえる．．．右大腿筋が痙攣する．．．もう限界だ．．．

どのくらい走つただろうか？彼女は完全に視界から消えていた．．．走るのをやめ 歩き出す．．．通行人の冷たい視線を感じる。立ち止まって深呼吸を繰り返す．．．「ふうふう．．．はあ．．．」呼吸が苦しい．．．走つたのは．．．200mほどだろうか？
（ 情けない．．．この程度の全力疾走で．．．学生のころは．．．そう思つたがこれが今の．．．現実だつた。
大腿筋を痛めたらしく．．．普通に歩けない。

彼女が走り去つた道をゆっくりと辿つてみる 横須賀線高架橋下をくぐり 下馬

（げば？しもうま？）交差点へ差しかかる。

（自転車か．．．考えもしなかつた．．．）交差点を右折してみる．．．（こつちの方が？．．．）

しばらく歩くと江ノ電の踏切が見えてくる．．．そこからは緩やかではあるが長い上り坂が続いていた．．．（もう．．．帰ろう．．．）

踏み切り手前で立ち止まり今来た道を戻る．．．左膝も痛む．．．ゆっくりと駅に向かって歩き出す．．．

その時 反対車線に一軒の小さな自転車店が見えてくる．．．（

田村自転車店．．．）

何を思つたかその店の前で立ち止まる．．．（自転車．．．か．．．）

（どうしたら．．．どうしても．．．）

店にはまだ明かりが灯っていた「こんばんは．．．」

「はい．．．いらっしやい」「70歳ほどの白髪の店主らしき男性

が出てきた……

「自転車……お探しですか？」

（もちろん……ここには自転車しか置いてない……）

「中古でいいんですが……ありますか？」思い切って訊いてみる。

「中古かあゝ先週まであったんだけどね……残念……売れちゃったな〜」

「……それじゃあ……一番安いの……で」「店主はニコリと微笑むと店の奥から青いフレームの自転車を出してきた……

「これかな……」ブリヂストン……

（そんなに高いやつじゃなくてもいいのに……）

「おいくらですか？」

「うーんと……27,500円……かな」

（……どうしよう）考え込む私を見て気の毒に思ったのか……

店主は

「そうだな〜登録料込み 25,000円でいいよ!」と言った。

「……じゃあそれで……お願いします」

「ありがとうございます……」

「じゃあこれに住所と名前書いて 防犯登録必要だからね」「そう言って店主は私に考える間を与えず……自転車を組み立て始める。

（住所と名前か……）「お客さん 近くに住んでるの?」「自転車を組み立てながら店主が訊いてくる……

「あつ……いえ 近々 引っ越してくる予定で……」「うそをつく……

一瞬偽名をと思ったが……全力疾走のダメージで全く浮かんでこない……

仕方なく本名を書く…… <東京都 練馬区……堤……>

ペンが止まる……

（なに やってんだらう……俺 本当に……どうかしている……

．．（店主が自転車を組み立てているのをぼんやり眺める。

「はい 出来ましたよお」

「あつ．．．はい」財布から30,000円を渡し5,000円のおつりをもらう．．．

「じゃあこれ保証書ね ありがとうございます」

店を出て駅まで今来た道を自転車で駆け抜ける．．．高いだけあつて乗り心地がいい（あつ これっ3段変速．．．）まだ冷たい風が頬を刺す。

時計は21時を回っていた．．．あつという間に 鎌倉駅が見えてくる

（どうしよう．．．この自転車）いまさら 自転車の置き場所に困る．．．

閑散としたロータリーを一周してみる．．．スタバ前の駐輪場を見つける。

（ここに置いておこう．．．）

自転車を置き 鍵をかける．．．痛む脚を庇いながら駅へと歩く．．．

震災の影響で湘南新宿ラインは運休していた．．．（とりあえず．．．東京駅か．．．）

ホームで電車を待つ人は私の他に数名しかいなかった．．．程なくして電車が入ってくる．．．

「はあ〜」思わずため息が漏れる。

ガランとした車内．．．シートに座る「はあ〜疲れた」遠ざかっていく鎌倉の

街にまた雨粒が落ちてくる．．．（桜．．．散らなきやいいけど．．．）（自転車．．．）

（．．．でも今度は大丈夫．．．）今度？諦めていない自分自身に驚く．．．

（じゃあ 何で自転車なんか．．．買ったんだ？）（いたっ膝．．．痛い．．．）

頭の中の整理がつかないまま電車は終点 東京駅に到着する . . .
丸の内線に乗り換えて . . .

家に着いたのは0 時を回っていた . . . シャワーを浴びて膝
と太ももにシップを貼る . . .

(あの程度の全力疾走で . . . まだいけるって思っていたけど歳
. . . だよな . . .)

PCを開いて見ると彼女から書き込みがあった。

<堤部長 今どちらですか?何していますか? 信州の「野沢菜」
とても美味しく頂きました、

残りのご飯 お茶漬けにして食べました(。(メチャウマ や
っぱり本場の野沢菜は違いますね)

(おやすみなさい) >写真には旨そうな野沢菜茶漬け
の写真が添えてあった . . .

(そういえば . . . お腹すいたな . . .)
<旨そうな 野沢菜茶漬けですね . . . 写真見ていたらお茶漬け

食べたくなって . . .
これからお湯沸かします。では また明日 (〃^ ^)ノ >

見えない鎖でつながれていた平凡な日々が彼女との出会いを境にし
て少しずつ輝きを

取り戻しているように感じた . . .
同時にさっきまで鎌倉にいたことなど告げることは出来なかった . . .

. 後悔していた . . .
すぐく . . . (なんであんなこと . . .)

お湯が沸き 残りのご飯に お茶漬けの素をかけてかつ込む . . .
翌朝 . . . 全身の痛みで起きる . . . (いったあ . . . 筋肉痛

か? あれだけの全力疾走で?)
改めて日頃の運動不足を痛感する . . . この痛みが昨晚のことが

現実だったのだと . . .
思い知る。

シャワーを浴びてスーツに着替える . . . 膝がまだ痛む . . .

家の鍵をかけようとスーツのポケットに手を入れる．．．（ん？
．．．）見知らぬ鍵が．．．

（やっぱり．．．自転車）昨晚の出来事がフラッシュバックして
また自分を責める．．．
それを振り払うかのように自転車に跨って駅へ急ぐ．．．もちろん
いつも乗っている

自分の 自転車で．．． 駅までは下り坂 春風が心地いい 深呼吸
をする 春の匂いがする．．．

駅まで続く桜並木も満開が近かった。

いつものように デスクでPCを開くと彼女からの返信があった1
時23 分まだ起きてたんだ．．．

<春らしくなってきましたね〜（*^^*）ノ 鎌倉の桜はもう少
しで満開です ．．．

堤部長の方はどうですか？>

<今朝は自転車で桜並木を走って来ました．．．こちらももう少し
で満開です >

「おはようございます〜」返信を書き込むと同時に突然声が聴こえ
る．．．

彼女がデスク脇に立っている．．．「堤部長 いつもお早いで
すね〜これ．．．

鎌倉のお土産です よかったら．．．食べてください」「そいつ
て彼女は黄色の

手提げ袋を私に手渡す．．．

「私 ここのサブレ 子供のころから大好きなんです！」

彼女はまた 零れそうな笑顔でそう言った．．．

「ありがとう．．．」私は顔が赤くなっていないか．．．心配
だった。それだけ彼女の

笑顔は眩しかった．．． 手提げ袋には「鎌倉 豊島屋」と書かれ
ていた．．．）

鳩サブレか．．．）彼女は自分のデスクに戻るといつもの様に淡

々と仕事を始めた。

私はコーヒを一口飲み彼女の方に目を向ける．．．彼女の姿を見ながら．．．

ふたりの静かで ゆっくりとした時間が過ぎていく．．．彼女のキーボードを叩く音が

微かに聴こえてくる．．．（この時間がずっと 続けばいいのに．．．）程なくして

オフィスが騒がしくなってくる．．．今日はミーティングが3つも入っている．．．

13 時過ぎ．．．デスクに一旦戻る15 分後またミーティングが始まるうとしていた．．．

（お昼抜きだな．．．）そう思った時： 彼女からもらった黄色い手提げ袋が目に入る．．．

（鳩サブレ．．．）箱から1枚取り出して食べてみる．．．サクッサクツとした食感と

優しいバターの風味に癒される。

（もう1 枚食べとこ．．．かな）（鳩サブレって鎌倉だったんだ．．．）

残っていたコーヒを飲み干し彼女の方に視線を向ける．．．彼女もこちらを見て微笑んだ．．．

（見られた．．．）PCを持ってミーティングルームへ急ぐ．．．16時過ぎやっと開放された。

デスクに戻るとPCを開くと受信BOXには30 件以上未読メールが溜まっている．．．

メールの返信や電話対応をしているとあっという間に18 時近くになっていた．．．

彼女も淡々と仕事をしている．．．さすがにお腹が空いていた。

スタバに行きテイクアウトする．．．「ブルーベリークリームスコーンとチャイ ラテ

グランデ．．．ホットで．．．」

「堤さん．．．残業ですか？ お疲れ様です」

「いや．．．昼抜きだったから．．．」デスクへと戻る．．．エレベーターを降りると彼女が立っていた．．．

「あつ．．．堤部長 お疲れ様でしたあ」

そう言つて 彼女は笑顔でエレベーターに乗って行った．．．デスクに戻る．．．

とりあえず買つてきたスコーンを口に入れチャイティラテで流し込む．．．スコーンが

喉に詰まる．．．PCをシャットダウンしバックに入れる．．．エレベーターを待つ．．．

こういう時に限つてすぐに来ない．．．スカイウェイを抜けて自由通路を足早に駅へと急ぐ．．．

彼女の姿はもうどこにもない．．．改札まで来たが．．．彼女を見つけることが出来ない。

（もう電車に乗ったのかも．．．なにやってんだ．．．戻ろう．．．）会社へ引き返す。

「ああ．．．」スタバの前を通ると彼女が店の中から出るのが見えた．．．彼女は私に

気づいていない．．．スマートフォンを見ながら駅へとゆっくり歩き出した．．．

私はまた彼女の後を追う．．．今来たスカイウェイをまた抜けて．．．自由通路から

改札を通り15番線ホームに降りていく。ホームに立っていると少し風が出てきた．．．

横須賀線 久里浜行きの電車が入ってくる．．．彼女は前と同じポジション．．．

車窓から街をぼんやりと眺めてる。車窓から見える風景にも少し慣れてきた．．．

横浜駅に近づくと窓に雨粒が当たってきた．．．（雨．．．か．．．）春先の天候は変わりやすい．．．

大船駅に着いた時は本降りになっていた。

私たちを含め 傘を持っている乗客はほとんどいなかった．．．
鎌倉駅に着くと乗客は

足早に改札へと流れていく．．．そんな中彼女はマイペースにゆっ
くりと改札へ歩きます．．．

その後を私もゆっくりとついていく。

駅を出た彼女は空を見上げていた．．．雨は少し小降りになってい
た。

彼女は駐輪場の方へ歩き出す．．．私はスタバの前の駐輪場におい
た自転車を探しに走る．．．

ポケットから鍵を出し 自転車を見つけロックを外す．．．急い
で駅に戻る．．．

そこで タクシー乗り場に並んでいる彼女を見つける。

（えっ．．．まさか．．． タクシーに）次々とタクシーは乗客
を乗せ走り去っていく．．．

彼女の順番がくる．．．躊躇なくタクシーに乗る．．．タクシ
ーはロータリーを半周して

信号で停まった。そのタクシーを買ったばかりの青い自転車が追う
．．．

すぐに信号は青に変わり右折するとスピードを上げていく．．．
すぐに引き離されてしまう

自転車．．．真っ黒な車体はそんどん視界から遠ざかって行く．．．
諦めずに必死でペダルを漕ぐ

．．． 雨で眼鏡が濡れて視界が曇る．．． 信号が赤になりタク
シーが停まる．．．

自転車のスピードを上げ真っ黒な車体に近づいていく．．．あと少
し．．． そう思った時に

信号が青に変わりまた引き離される．．． 自転車は水しぶきを上げ
てタクシーを追う．．．

（あゝ もう．．．ダメだ．．．）ペダルを漕ぐ音が雨に消され

ていく．．．

タクシーは横須賀線の高架橋を抜けて視界から完全に消えていった．．．
冷たい雨が容赦なく降り続いていた自転車を止める．．．（．．．
戻ろう）

びしょ濡れでスーツの色が変わっていた．．．「ハア．．．ハア．．．
ハア」呼吸を整える。

春雨に濡れた鎌倉の街を自転車は駅へと戻って行った。

頬を伝う冷たい雨粒．．．眼鏡を外しハンカチで目を拭って
ゆっくり ゆっくりペダルを

漕ぎ始める．．．脚が重い．．．（また．．．なにやってん
だろ．．．俺）

自分自身の行動すらもはや理解できない．．．自転車を元の場
所に戻す．．．

（なぜ．．．なぜこんなことをしてるんだ？）理由．．．を
探す 冷たい雨に打たれなら．．．

鎌倉駅へ歩き出す．．．雨空を見上げる。

（明日．．．晴れるかな．．．）

（明日も．．．鎌倉に．．．）もう引き返せない．．．そ
んな自分がいた。

びしょ濡れのスーツ姿を見て 乗客が怪訝な顔をする．．．その
後 家までどうやって

帰ったのか？記憶がない．．．濡れたスーツを脱ぎ捨てて 暑い
シャワーを浴びてすぐ

ベッドに横たわる。明日も朝からミーティングだった．．．
（早く．．．寝なきゃ．．．）眠りにつく．．．寒い．．．寒

気がする。

翌朝、身体がだるくて起きることができない．．．体温計で熱を計
る（37.8．．．か）

（会社行かないと．．．）とりあえず起きてトマトジュースを一

杯飲んでから熱い

シャワーを浴びる。「まだ 居たの？」

「ああ．．．」

毎朝家族が起きてくる前に家を出るので珍しく妻と顔を合わす。

家から会社にメールを送る．．．

「体調不良で、病院に寄ってから出社します。午前のミーティングは午後に変更してください。」

食欲もなく、水を一杯飲んで駅前のクリニックへ向かった。

（まさか．．インフルエンザ？）また寒気が襲ってくる．．．
待合室での時間が長く感じられる。

「堤さん どうぞ〜」．．．やっと名前が呼ばれる．．．

「堤さん．．．そうされました？」「今朝起きたら身体だるくて．．．
熱も37.8．．．で」

「念のためインフルエンザの検査もしておきますか．．．」幸いにもネガティブだった．．．

「風邪．．．ですね．．．」

「最近 疲れ溜まっていたでしょ〜」主治医が続ける．．．

「抗生剤も出しますから飲みきってくださいね」薬局で薬をもらいその場で飲む．．．

（よし．．．行ける．．．）気合で自分にそう言い聞かせる。絶対出席しなければならぬ

ミーティングではなかった．．．

ただ．．．彼女に早く逢いたかった。空は 昨晚の雨が嘘のように晴れ上がっていた．．．

春の優しい日差しが濡れた桜の花びらに照り付けて眩しい．．．

12 時少し前 品川駅に着くcuteで豆狸のお稻荷さんとお茶を買ってデスクへ向かう。

「部長．．．大丈夫ですか？顔色悪いですよ．．．」天谷が心配そうな顔をして訊いてくる。

「ああ．．．大丈夫だ 問題ない！午後はスケジュール通り進め

てくれ．．．」

本当は 全身の関節が痛くてしかたない．．． きっと熱も出てきている。

買ってきたお稲荷さんをお茶で無理やり流し込む．．． 今日スタバに行けないな．．．

皆 お昼に出ているのかオフィスの中は閑散としていた．．． 彼女の姿も見えない。

しばらくデスクに座って目を閉じる．．．

「部長．．． 堤部長．．． ミーティングのお時間ですよ 顔が熱っぽいですよ．．．」

もう帰った方が．．． 「また 天谷が心配する。

「大丈夫．．． だ」 「ミーティングルームへ向かう。

ミーティングの記憶は途切れ 途切れしかなかった．．．

16 時過ぎにデスクに戻ると冷えたポカリスエットが1本置いてあった 手にとって

周りを見渡す．．． (ん?) (だれ?．．．) 「えっ．．．う

そ．．．」 彼女がこちらを見て

微笑んでいる．．． (．．． 彼女か．．．)

ボトルを持ち上げ「サンキュ．．．」と口を大きく開け．．． 小声でつぶやく．．．

すると彼女はまるでCAのように 右腕を大きく上げ親指を立てる OKサインで応えてくれた．．．

私が熱を押して出社して来たのを聞いたのだろうか?

彼女は その原因が昨夜の鎌倉の雨にあることを知る由もなかった。

しばらくデスクから彼女を眺めていた．．． ただ近くで見ているだけで幸せな気持ちになる。

私はもう1度だけ彼女を追うことにする．．．

(今夜．．． もし．．． たどり着けなかったら諦めよう．．．) そう決意する。

17時30分 私は帰り支度をしてスタバに入る・・・

「チャイラテ・・・ホット・・・シヨートで・・・」

「堤さん・・・顔色悪いですよ調子悪そう・・・」

「ああ・・・風邪引いちゃって・・・」

「働きすぎですよ 少し休んだ方がいいですよ・・・」

「ありがとう・・・」窓側の席に座る・・・「ふう・・・」

関節痛はだいぶ収まってきていた・・・熱も下がっている・・・だろ
う・・・たぶん。

チャイテイ ラテを飲み終えエントランスで彼女が降りてくるのを
待つ・・・

(今夜で・・・最後・・・だ)(何かを断ち切らねばならない・・・)
自制心はそう言っていた。

40分ほどして彼女の姿が見えた・・・ベージュのスプリングコー
ト・・・にブーツ・・・

この前と同じ 髪は水色のシュシュで結んでいる・・・彼女はエレ
ベーターホールから

こちらへゆっくりと近づいてくる。

私はエントランスの柱の陰に隠れて彼女をやり過ごす・・・そし
て品川駅へと向かう彼女を追う。

彼女はいつものようにゆっくりと自由通路から改札の方へ歩いてい
く・・・ 私は彼女との

距離感を保ちながら 見失わないようについていく。

彼女はゆっくりと15番線ホームへ降りていく・・・

少し風が出てきて肌寒い...ホームから空を見上げる(雨は大丈夫
そうだ・・・)

久里浜行きの電車がホームに入り彼女と同じ車両の隣のドアから乗
る・・・ 全身がだるくて

つり革を掴む。

左側に目をやる 車窓から遠くを見つめている彼女が目に入ってくる。
る。

見慣れた風景が車窓から流れる．．．私は．．．最初から彼女と向き合う覚悟がなかった．．．
ゴールを探すのを怖がっていた．．．私は彼女に恋する資格があるのだろうか？
お世辞にも器用じゃない私は 見えるはずもないゴールに向かって迷走していた。

（この風景を見るのも．．．今夜で 最後だ．．．）

（こんなこと．．．きつと この熱のせいだ．．．きつと．．．）
彼女はドアの脇に立ってスマートフォンを見ていた．．．

真つ赤なエツフェル塔のストラップが揺れている 頭の中がボォ／＼
つとして彼女が霞んで見える。

横浜駅を過ぎるとスマートフォンをバックに入れてまた遠くを見つめる彼女の横顔はなぜか

悲しくて．．．寂しそうだった。

（この前も．．．こんな顔 してたっけ．．．）自分の顔が車窓に映し出される．．．

「ふう／＼．．．」大きく息を吐く．．．電車は鎌倉駅のホームへと滑り込む。

人波は改札へ流れていく．．．彼女はいつものように：最後尾をゆっくりと歩き出す．．．

私も気力を失わないようにその後についていく。

改札を抜けて左折する．．．（ 駐輪場．．．）私は右折してスタバ前の駐輪場へ急ぐ．．．

まだ2回しか乗っていない新品の自転車に跨り駅のロータリーへ向かう．．．

緊張からかハンドルを握る手に力が入る．．．心臓の鼓動が早くなつていくのがわかる

不思議と身体のだるさは取れて意識もはっきりしているロータリーで彼女を待つ．．．

駐輪場の方から数台の自転車が近づいてくる．．．彼女の姿は見

えない．．．

（そんな．．．見失ってしまったのか？）辺りを見渡すが彼女らしき人は見えない．．．

また数台の自転車が走ってくる．．．（あっ．．．）最後尾に赤いフレームの自転車に乗った

彼女の姿が目飛び込んでくる。

彼女からの視線を避けるように．．．自転車を端に寄せて待つ．．

彼女との鎌倉

彼女はロータリーを抜けて駅入口交差点で停止する。

信号が青に変わる．．． 自転車はゆっくりと走り出す．．．
レストラン．．． ミスタードーナツ．．． などが建ち並ぶ商店
街を自転車は軽快に

駆け抜けていく．．． （最初はこの辺りで．．． ギブアップだっ
た．．．）

しばらく行くと横須賀線の高架橋が見えてくる．．．

（ 昨夜はタクシーをこの辺りで見失ったんだ．．． ）
記憶が鮮明に蘇ってくる。彼女の自転車は高架橋をくぐり交差点を
右に曲がっていく．．．

この自転車を買った 田村自転車店の脇を通り緩やかな上り坂を進
む．．．

江ノ電の踏切が見えてきた。

ここから先は初めての道．．． 踏み切りを超え 彼女は慣れた様
子で坂道を上がっていく．．．

道行く車も人も少なく、周りはいつの間にか私と彼女だけにな
っていた。

静けさの中で．．． ふたりの自転車が一定の距離を保ちながら走っ
ていく。

六地藏を過ぎて．．． 左手に 由比ヶ浜郵便局が見えてくる．．．

（ 由比ヶ浜？．．． 海が近いのか？ ）

どこまで行くのだろうか．．． しばらくすると 自転車はスピードを
落としていく．．．

文学館入口交差点を左折し細い路地に入って行く。

10mほど先で彼女は自転車を降りる．．． 私も自転車を停めて
彼女を見守る．．．

大型犬だろうか？ 犬が彼女に甘えるように吠えているのが聴こえて

くる．．．

門を開け自転車を入れる彼女の姿が見える。

彼女が玄関に入ったのを見計らって自転車をゆっくり近づけていく．

心臓の鼓動が早まる．．（ここが．．彼女の．．やつと）白壁の大きくて立派な家．．

よく手入れのされた生垣が家の周りを囲っていた．暖かい明かりが外に洩れている。

間違いなく．．今彼女はここにいる．．生垣の奥にいた秋田犬がこちらに走って

来てしつぽを振っている．．（．．番犬なんだから．．吠えなきやダメじゃないか．．

彼女のこと守っているんだろう．．（そうつぶやき．．彼女の家を後にする。

「ふう〜」一息ついて自転車を駅に走らせる．．帰りは下り坂．

自転車はどんどんスピードを上げていく。夜の風が心地いい．．心の中も清々しい．．

充実感？いや．．なんだろうこの気持ち．．でもなんだか寂しい？．．

複雑な感情が入り混じっていた。

今来た道のりを半分の時間で戻る．．またスタバ前の駐輪場に自転車を置く．．

もうここに来ることはないだろう．．彼女に永遠に逢えなくなる訳でもないのに．．

なんでだろう？また寂しさが込み上げてくる。

空を見上げる．．夜空にはきれいな星が鎌倉の街に降り注いでいる．．

駅のホームに立っているとこの数日間の出来事が思い出される．．（ホント．．なに．．やってたんだろうな．．）悩んで．．

悔やんで．．．を繰り返し．．．

ぼんやりと鎌倉の空に浮かぶ月を眺める．．．そして 捻り出した
答えは．．．

彼女が好き．．．それ以上の意味などない．．．ただ 彼女のこ
とが好きだった。

しばらく待つて電車がホームに入ってくる．．．ドアが閉まり
ゆっくりと

鎌倉の街が遠ざかって行く．．． 暗闇の車窓から見える鎌倉の山
々を見て

(でも．．．忘れよう．．． 忘れなきゃ．．．)と繰り返す．
．．． 彼女に出逢つてから．．．

本当の切なさを覚える。
でも．．．今の私には彼女を好きになる資格などない．．．そう
思っていた。

(さようなら．．．ごめん．．．)

緊張感から開放されて全身の寒気と関節痛に襲われる．．． 2時
間後 やつと

家まで辿り着く。

熱いシャワーを浴びてベッドに入る前PCを開く．．．彼女からの書
き込みがあった．．．

<堤部長 風邪辛そうでしたね．．．具合はどうですか?ちゃん
と病院とか行きました?>

健康診断とか．．．ちゃんと 毎年受けてますか?>(健康診断
つて．．．)

また矢継ぎ早に質問してくる．．．でも心底心配してくれているん
だなあって伝わってくる。

<風邪の時は生姜湯がいいですよ>(> (ヾ) ^ ^) うち
の母は風邪の時必ず作ってくれます

今夜は早くお休みになつてくださいね . . . * . . .

ゝ . . . * . . . >

(3時間前まで . . . 鎌倉で . . . 自転車 . . . 言えるはずもな

く . . .) 彼女の優しい言葉のひと言

ひと言が先ほどまでの決心を鈍らす . . . 返信する . . .

< ありがとう だいぶ楽になりました 嘘つき . . .

(生姜湯 今度作ってみます

(おやすみなさい >

ベッドに入る . . . 身体は辛くて休みたいはずのに . . . それを許さない . . .

なかなか寝付けない . . . また . . . 罪悪感が沸いてくる . . .
彼女を裏切ってしまったような . . . 深い . . . 罪悪感が私が眠り
につくことを許さなかった。

私には生姜湯を作ってくれる人も . . . 身体のことを 心底心配し
てくれる人も

ここにはいなかった . . . ただ . . . 寂しかった。想いを
思い出にしようと心に誓う . . .

(とにかく眠らないと . . .) 罪悪感から逃れるように . . . 無理やり 眠りに付く . . .

翌朝 熱は下がっていたがまだ身体はだるかった . . . 念のため
クリニックへ寄ってから出社する。

(あまり無理は出来ないな . . . もう 決して若くはないのだから . . .)

そう自分に言い聞かせる . . . 週明けには体調も戻りいつも通り
出社する。

大泉学園駅までの桜並木は満開になり時折風で花びらが舞っていた . . .

いつも通りスタバでコーヒーをテイクアウトする . . .

「堤さん . . . おはようございます」

「おはよう . . .」 デスクへと向かう いつもと変わらない日常が
また始まった。

デスクでPCを開くと . . . 彼女からの書き込みがあった。

(1時間前・・・今朝?7時過ぎか・・・)

<堤部長・・・おはようございます　もう出社されていますか？

鶴岡八幡宮の桜も今　満開です。(* ^ ^ *)ノ　桜が散ってしま
う前に・・・

桜を見に鎌倉へ来ていただけませんか・・・>

彼女からの書き込みを何度も　何度も読み返す・・・(鎌倉・・・
桜・・・)

もう行くことはないだろうと思っていた鎌倉・・・忘れようと思っ
ていた鎌倉・・・

彼女からの誘いは　素直に嬉しく　心　ときめいた・・・鎌倉を・・・
忘れられる訳もなかった・・・

私にとって鎌倉は特別で大好きな街になっていた・・・そして返
信する。

<ありがとうございます・・・　鎌倉の桜　楽しみです。鶴岡八幡宮も案内し
てください>

顔が紅潮してくるのがわかる・・・　もう熱はないはずなのに・・・

「おはようございます」

「・・・おはよう・・・」

「堤部長・・・　もう大丈夫なんですか？お身体・・・顔・・・まだ
赤いですよ・・・」

天谷が訊いてくる。

「えっ・・・ああ・・・もう大丈夫　問題ない・・・」PCを持つ
てミーティングルームへ上がる。

30分ほどして　ミーティングから戻りデスクから彼女に視線を向
ける・・・

いつものようにPCと向かい合っている。(返信・・・見てるのか
な?)

一瞬・・・目が合うも　彼女はすぐさまPCに目を向ける。

午後からは人事部と内々に転勤に関してのヒアリングが行われる．

家族も含めスウェーデンへの転勤の話は誰も知らなかった．．．
今週 水曜日からは大阪出張も入っていた。体調も食欲も回復し昼食は本格 インドカレー Devicourner にする。

昼食はいつもひとりだ．．．お店に近づくとスパイスの香りが漂っていて食欲をそそる。

チキンカレーと豆とほうれん草のカレーを注文する．．

人事部からは5月の連休明けまでに正式な返事が欲しいと言われていた．．．

しかし 今の私には転勤のことよりも 彼女との鎌倉の方が．．．
心の中を支配していた。

久しぶりのインドカレーは旨かった．．． 帰りにチャイティラテをテイクアウトし

デスクへと戻る．．．彼女からの返事が着ていた。

<ありがとうございます．．．桜の散る前に来てください（*・人*）

今週は無理…ですよね？金曜日とかでも平気です >（水曜日から大阪か．．．）

返信する．．．<じゃあ．．．金曜日にしよう 時間は午後でいいかな？>

今 私 の 最 優 先 は 彼 女 だ っ た 。 す ぐ 大 阪 支 店 へ 連 絡 し 大 阪 出 張 の 延 期 を 依 頼 す る ． ． ．

20 時近くまでデスクワークをして帰り際にfacebookを開く．．．彼女からの返信があつた

<ありがとうございます 金曜日 私お休み頂いてるんです。

じゃあ 午後3時に鎌倉駅の改札でお待ちしていますゞ(@^ ^ @)ノ >

15日 金曜日．．．スケジュールにチェックを入れる．．．なにがあつてもこの日は鎌倉へ行く．．．

私たちはお互いの携帯電話の番号も知らない．．．いまさら携帯番号を訊くのも不自然に思えた。

幾千の言葉を重ね．．．ふたりの距離は近づく．．．近くなればなるほど もどかしさは募っていく．．．

水曜日からの大阪出張を延期してスケジュールを日帰りで戻れる山梨と群馬に変更した．．．

水曜日の山梨 木曜日の群馬と仕事は問題なく順調に過ぎていく．．．
(いよいよ．．．明日か．．．)

天気が気になる．．．天気予報は晴れだった。

4月15日金曜日．．．朝 駅まで続く桜並木は花が散り始めて歩道は桜色に染まっていた．．．

(鎌倉の桜も散り始めているのだろうか．．．) 桜並木をゆっくりと歩きながら深呼吸する。

(桜．．．か．．．) (そういえば 彼女 だいぶ前から桜って．．．)
(空を見上げる)

(よし いい天気だ．．．)

午後からは横浜方面への外回りの予定にしていた．．．もちろん鎌倉へ行くために．．．

強引に入れたスケジュールだった。デスクから彼女へ視線を向ける．．．

(ああ．．．そうか．．．彼女今日は 休みか．．．) 午前中のデスクワークは退屈だった．．．

時計ばかり気になる．．．(まだ11時か．．．)

今日に限って時間が経つのがすごく遅く感じてしまう．．．やっと昼．．．

オフィスビル内の寿司屋でバラちらし丼を頼む．．．(少し．．．早めに出よう．．．)

デスクに戻って 残っていたデスクワークを急いで片付ける。

「部長．．．お出かけになりますか？」天谷が訊いてくる．．．

「えっ．．．ああ．．．今日はたぶん．．．直帰する」

「はい．．．わかりました　いつてらっしゃい」バックにPCを入れ
会社を出る。

逸る気持ちを抑えて自由通路を抜ける．．．改札口を通り15番
線ホームへと降りていく．．．

（そんな時間は経っていないはずなのに．．．なぜか．．．懐かしく
感じる．．．）

程なくして久里浜行きの電車が入ってくる．．．この前と同じドアか
ら乗り込む．．．

ドアが閉まり電車はスピードを上げていく。

車窓からは見慣れた街並が見えてくる．．．いつも見ていた夜景と
は少し違った街

の空気を感じる。

平日の昼過ぎで車内は空いていた．．．シートに座る．．．窓からは
春の穏やかな日差しが

街を包んでいるのが見える。横浜駅に近づく．．．ランドマークタワ
ーがビルの隙間から見えてくる

。横浜駅で穏やかな老夫婦が入ってきて私の隣に座った．．．鶴岡八
幡宮に参拝にでもいく

のだろうか．．．老夫婦は楽しそうに話　笑っていた．．．時間
がゆっくり流れる。

戸塚．．．大船．．．北鎌倉．．．そして鎌倉駅．．．もう来る
ことはないと思っていたこの街に

私は再び降り立った。
夫婦同士　友達同士．．．みんな楽しそうに改札へ向かって歩く．．．

その後ろをスーツ姿の
私はゆっくりとついていく。

改札を通り抜ける．．．時計を見る13　時57　分．．．15　時
まで1時間近くある．．．

私はスターバックスへ向かった．．．（あった．．．）店の前の駐輪場
には真新しい

青いフレームの自転車が置いてあった。(この自転車・・・どうしようか・・・)

店内に入ってチャイティ ラテを注文する。

バックからPCを出してメールをチェックする・・・

急いで処理しなければならぬ用件は入っていない。待ち合わせをするのなんて・・・

何年ぶりだろう・・・私は相手よりいつも先に着いて待っていた・・・
こうやって好きな人を
待つのが好きだった。

14 時46 分・・・鎌倉駅の改札へ戻る・・・

改札の前に立ちまわりを見渡す・・・ホームから降りてくる乗客・・・

彼女はどこから現れるのだろうか・・・ 心臓の鼓動がどんどん高鳴っていくのを感じる。

(場所は・・・ここで間違いない・・・) しばらくして また人波がホームから改札に押し寄せる・・・

彼女の姿は見えない。(ここ・・・だよな・・・)

時計を見る・・・15時ちょうど 周りを見渡してみる・・・少しだけ・・・不安になる。

でも好きな人を待つのは嫌いじゃない・・・(学生時代もよく待たされた・・・)

時計を見る・・・15 時10 分(あつ・・・)携帯・・・

「・・・堤です・・・ああ・・・その件なら天谷に指示してある」

「ああ・・・わかった・・・問題ない」(なんとか処理できそうだし・・・)

そう思った瞬間： 不意に左肩を叩かれる・・・「堤部長・・・本当に・・・」

来てくださったんですね・・・鎌倉に「振り返ると 膝丈の真っ白なワンピースを着た

彼女が春の日差しの中微笑んで立っていた・・・

「遅くなつて．．．すみません．．．待ちました？」彼女があまりにも眩しすぎて．．．直視できない．．．

「いついや．．．今．．．着いたところ．．．」

「．．．そうですか．．．よかったです」

そういつて彼女はこぼれるような笑顔をみせる。

私は間近で見る彼女の笑顔に心奪われていた．．．

「お仕事．．．大丈夫なんですか？」

彼女が私の顔を覗き込み心配そうに訊いた。

「ああ．．．大丈夫 問題ない．．．」

「．．．堤部長の口癖．．．大丈夫 問題ない．．．」そう言っ

て彼女がまた笑う．．．

「そうか？」

「そうですよお いつも言ってますよ」私も少し笑う．．．

「ああ」笑ったあ．．．堤部長 会社じゃ怖い顔ばかりだから．．．

「

「そうか．．．？」

「そうですよお」

（思えば．．．最近笑つたことなどなかったかも知れないな．．．会社

以外でも．．．）

「じゃあ．．．行きましょうか．．．」

「あつう．．．うん．．．」ふたりは ゆっくりと歩き始める。

駅のロータリーを左方向に回る．．．ふたり肩を並べて歩くこと

が嬉しくて．．．

少し恥ずかしい．．．私は気持ちを悟られない様に遠くに視線を移

す．．．

「堤部長．．．」

「んっ．．．」

「本当は私．．．少し前に駅に着いてたんですよ．．．」

「えっ．．．」

「少し離れたところで．．．堤部長のこと．．．見ていたんです．．．」

「．．．」(なんで?．．．訊くのをやめた)

「なんだ．．．恥ずかしいな．．．」彼女の方から優しい．．．春風が吹いてくる．．．

(あつ．．．ヴァーベナ．．．?)彼女から爽やかな柑橘系の香りが春風と共に通り過ぎる．．．
ホワイトデイのプレゼントを選んでいた時．．．丸の内のL' O
CCITANEで店員さんに
勧められた香りだった．．．(確か．．．恋を呼ぶハーブの香り．．．)

「ごめんなさい．．．」

「いつ．．．いや．．．問題ない．．．」

「．．．あつ．．．」ふたりは顔を見合わせて笑った．．．
ふたりの時間を愛おしむ かのよう に 私たちは表参道をゆっくりと歩き出す．．．

彼女は私の左側．．． 私は 振り向きたい気持ちを抑え．．．気持ちを悟られないように
一点を見つめて歩く。

「．．． 堤部長は 鎌倉初めてですか？」

「えっうん．．． 小学生の時代以来かな．．．」

(また．．． 嘘をついた．．．)

「鎌倉って．．．いい街だね」

「堤部長もそう思いますか 私も生まれ育ったこの鎌倉の街が大好き！」

そう言っ て私の方を振り返る．．． 白いワンピースの裾が春風に靡く．．．

「．．． 堤部長．．．」

「会社じゃないんだ．．． 堤でいいよ．．．」

「はい．．． じゃあ．．． 堤．．． さん．．．」(出身は? 東)

京ですか？」

「．．．山形．．．」

「山形かあ」

「ああ山形の鶴岡．．．山と川に囲まれた小さな街．．．もう何年も帰ってないなあ」

「鶴岡かあ堤さんの生まれ育った街．．．一度行って見たかったな．．．」

（行って見たかった．．．？）彼女は小さい声でつぶやいた。

「子供のころは．．．ガキ大将．．．でしょ」

「そう．．．あの頃は楽しかったなあ」

「今は．．．今は楽しくないんですか？」

「今か．．．」

「ごめんなさい．．．また変なこと訊いちゃって」

「そうだ．．．いつも美味しいお土産　ありがとうございます．．．オフィスじゃ面と向かってお礼も言えなくて．．．

母といつも言ってるんですよ．．．なんで堤さんのお土産はこんなに美味しいもの

ばかりなんだろう？って」

「DNA．．．かもな．．．僕の父もそうだったから」

表参道に出る．．．平日でもお花見客と参拝客で賑わっていた。

ホテル鎌倉の前からは　鶴岡八幡宮の朱色に聳える二の鳥居が見えてくる。

鳥居に向かってまたゆっくりと歩き出す。「．．．少し左を向いてみる．．．」

微笑んだ彼女もこちらを向いて視線が合う．．．すぐに前を向き鳥居に目をやる。

「facebook．．．いつも．．．ありがとうございます」

「私の方こそ．．．ありがとうございます．．．堤さん顔文字とか上手くなりましたね．．．」

そう言ってまた私の顔を覗き込んで笑った．．．

「ああ練習．．．したからな．．．」真面目に答える。

「私は娘に勧められてスマートフォンにしたんですよ．．．でもまだ使い方がよくわからなくて．．．face bookもスマートフォンからです 堤さんは？」

「僕は．．．PCから出張の時もPCは手放せないから．．．スマートフォンにしたいって思っているけど．．．」

「そうなんですか．．．」
「．．．」
まだ 少しぎこちない そんな ふたりの会話が続いた．．．
二の鳥居の前までやってくる。

「人力車 記念にいかがですか？」体格のいい日焼けした車夫が声を掛けてきた。

「すみませ〜ん写真撮ってもらっていいですか？」

（えっ？ 写真って．．．俺たちの？）彼女はバックからスマートフォンを取り出した．．．

「はい！いいですよ」車夫が近づいてくる．．．見覚えのある赤いエッフェル塔の

ストラップが付いたスマートフォンを車夫に手渡す．．．

「堤さん 写真撮りましょ！」

「えっ ああ．．．」

「えっとおゝもう少し近くに寄ってもらえますかあゝ」スマートフォンを片手に

車夫が身振りで指示を出す．．．彼女は言われる通り私の左に寄り添ると．．．

私の左腕を掴んできた。「．．．」

「じゃあ撮りますよゝハイチーズ」たぶん．．．私の顔は引きつっていた．．．

「ありがとうございますあ」

彼女は何もなかったかの様にスマートフォンを受け取ってバックに入れた「。。。」

「ごめんなさい．．．写真．．．嫌でした？」

「いや．．．問題．．．」そう言いかけてやめる．．．
「あつ．．．．．また」ふたりは顔を見合わせ　笑った．．．
春の日差しがふたりをやさしく包みこむ．．．　朱色の鳥居をくぐ
る。

春風に桜の花びらが舞っている．．．「キレイ．．．」小さい
声で彼女はつぶやく。

彼女が言っていた通り　段葛の桜並木は見事だった。「．．．」肩
を並べて歩くふたり．．．
まるで恋人どうしのような．．．でもまだどこか　ぎこちないふた
り．．．

でも．．．私は何か　彼女が無理をしているように思えてならなか
った。

「大丈夫．．．？」

「．．．はい．．．平気です」

舞い散る花びらがライスシャワーのように降り注ぐ．．．
それは．．．まるで　ふたりを祝福しているようだった。

（この桜の段葛が永遠に続けばいいのに．．．）そう思えてならな
かった。

三の鳥居をくぐり境内をゆっくり進む．．．彼女は黙ったままだっ
た。

舞殿の奥高くに緑の木々に包まれた美しい本宮が見えてくる。

石畳の上をゆっくり歩いていく．．．

「．．．初めて出逢った日のこと．．．覚えていますか？」彼女
が突然話し出す。

「．．．初めて．．．出逢った．．．」

（彼女と初めて出逢ったのは確か．．．1月．．．8日？　年末か
らのトラブルを

解消するために休日出勤してきた時だった．．．）「確か．．．

1　月8　日じゃなかったかな．．．」

「．．．違いますよ．．．もつと前．．．去年の12　月24　日．

・クリスマス イブ・・・」

「・・・クリスマス イブ？」

「私・・・会社の面接に来ていたんです・・・その時スタ・ボックスの中で・・・」

（1月8日じゃなかったのか・・・ 12月24日？）

「堤さん ものすごく怖い顔して・・・PC見ている この人クリスマス イブなのに・・・って」

（去年のクリスマス イブ・・・）

「・・・堤さん・・・すごく悲しそうな目をしていて・・・なんだか・・・気になっちゃって・・・」

「そして・・・年が明けて会社に行ってデスクの先に・・・堤さんがいて・・・驚いちゃって・・・」

「そうだったのか・・・」私はそう言っただけ空を見上げた。

（ふたりはクリスマス イブに出逢っていたんだ・・・）

ふたりは出逢う運命だった？彼女がどう思っていたかは知らないでも私はそう思った。

彼女は舞殿の前で立ち止まって・・・歌を詠む・・・

『吉野山 峰の白雪 ふみわけて 入りにし人の 跡ぞ恋しき・・・』

静御前が義経への想いを歌にここで舞ったんですよ」

彼女がまた私の顔を覗き込んで微笑んだ・・・

「・・・詳しいんだね」

「だって私 鎌倉生まれ 鎌倉育ちですよ」彼女が腕組みをして笑った。

ふたりはまるで・・・高校生がデートをしているように初々しかった・・・

私は ただ 彼女を近くで見つめているだけで幸せを感じていた・・・

本宮に上がる大石段脇の大銀杏で彼女は立ち止まる・・・彼女の表情は急に悲しみに

包まれていった。

彼女は大銀杏の切り株に向かつて静かに手を合わせた．．．私と一緒に手を合わせる．．．「昨年．．．倒れちゃったんですよ．．．」

彼女は小さくて悲しい声でそうつぶやいた。

「大銀杏．．．堤さんに：見せたかったな」彼女は真つ青な空を見上げて言った．．．

（泣いているの？）そんな彼女を心から愛おしく想った。

白いワンピースが春の光に照らされて眩しかった．．．

ふたりは 大石段を一段 一段ゆつくりと登り始める．．．

61段の階段を登りきると桜門その奥に本宮がある。ふたりは何も言わずに

ただ上を見て登っていく．．．

「堤さん 着きましたよ」最上段から振り返って見る．．．そこには美しい

鎌倉の街が広がっていた。

（ここが．．．彼女の生まれ育った街か．．．）春の光に包まれた鎌倉はとても美しく．．．

そしてふたりをやさしく迎えてくれた。

段葛の満開の桜がピンク色の帯となつて表参道に伸びている．．．

「堤さん．．．ここが私の生まれ育った街ですよ．．．」そう言つて彼女は両手を空に向けて大きく

広げた．．．

「来てよかつた．．．」私は小さい声でつぶやいた。

「いつか．．．鶴岡の桜．．．見せてくださいね．．．」そこには彼女の溢れそうな笑顔があつた．．．

それからふたり並んで本宮に参拝する．．．

来年の春もまた．．．彼女とここに来ることが出来ますように．．．と願う 左を振り返ると

彼女はまだ瞳を閉じて手を合わせていた．．．

(彼女はいつたい．．．なにを願っているのだろうか．．．)
参拝を終えて．．．今来た道を戻る．．．ふたりは黙ったままだ
った。

大石段を一步一步ゆっくりと下りていく．．．右下に大銀杏の切
り株が見える．．．

彼女はそれをじっと見つめていた。舞殿の脇を通り境内を並んで歩
く．．．

振り返ると美しい本宮がもう遠くに見えていた．．．彼女も何度
も振り返る．．．

もうここに来ることがないかのように．．．
境内から三の鳥居をふたりでくぐる．．．段葛の満開の桜の下
をゆっくりと歩き出す．．．

左隣の彼女との距離が．．．ふたりの距離が．．．前より近くなっ
ている気がする．．．

私の左手と彼女の指先が一瞬触れ合う．．．(あっ．．．)
その瞬間 彼女は私の左手を強く握りしめる．．．思わず左を振り
向く．．．

彼女の瞳は遠くを．．．遙か遠くを見つめていた 私も彼女の手を
強く握りしめる．．．

握りしめたその手のひらの温もりは痛いくらいに愛おしかった

ふたりはゆっくりと 段葛の桜並木を歩いて行った．．．

桜吹雪がふたりを包み込むように舞っていた．．．

「．．．ありがとう．．．」消えそうな声で確かに彼女はそう言
った．．．

「．．．ひとりじゃないから．．．」私は心の中で そうつぶや
いた．．．

ふたりの時間はゆっくりと流れていった．．．

もう逢えないと知っていたなら私は繋いだ手をいつまでも離さず
にいただろう．．．

二の鳥居に戻った時ポケットに入れていた携帯が振動する．．．

「堤部長．．．出てください．．．」

彼女は笑顔でそう言った．．．「ああ．．．うん」携帯に出る．．．

天谷の切迫した声が聴こえてくる．．．

「堤部長 今どこですか？すぐにオフィスに戻れますか？．．．」

「ああ．．．わかった．．．」

「お仕事．．．ですね．．． オフィス．．．戻ってください」

「でも．．．」

「いいんです．．． 問題ない．．．」彼女はそう言って 笑った

．．．

「今日は．．．ありがとうございました．．．本当に楽しかったです」

「ああ．．．楽しかった．．．」

「じゃあ．．．行ってください」

「じゃあ．．．また．．．」私は駅に向かって歩き出した。

少し歩いて 彼女の方を振り返る．．．

白いワンピース姿の彼女が二の鳥居の下で大きく手を振る．．．

私も手を振り返す。

まだ50 mも離れていないはずなのに．．． 彼女の存在がすぐ

く．．．遠くに感じられた。

私はそんな 不安な気持ちを振り切るように鎌倉駅に向かう．．．

鎌倉駅の改札でまた振り返る

．．．彼女はもう見えるはずもないのに．．． (ダメだ．．．)

私は表参道に引き返そうと歩き出す．．．携帯がまた振動する．．．

天谷からのメールだった．．．

<部長．．．状況が一段と深刻になっています．．．至急帰ってきて

てください！>

鎌倉駅前で立ち尽くす．．．仕方なく改札を抜けてホームに立つ

(また．．．来週 逢えるさ．．．きつと…) ホームは観光客で混

雑していた。

電車を待つ間 左手をじっと見つめる．．．彼女の手の温もりがまだ残っている．．．

これからは 彼女とまっすぐに向き合おう そう思って左手を強く握りしめる。

しばらくして電車がホームに入ってくる．．．まだ春の日差しに包まれている

鎌倉の街を後にする．．．

品川駅に着きホームから改札へ向かう途中．．．携帯に連絡が入る．．．

「部長．．．あと どのくらいで着きますか？」天谷の緊張した声が聴こえる。

「今 駅に着いたら5分ほどで．．．」

「わかりました．．．コーヒー買ってありますから．．．」

「ああありがとうございます」

デスクに戻る．．．天谷の報告を聴く．．．スウェーデンの委託工場との契約トラブルと

製品仕様についてもトラブルが発生していた．．．（まずいな．．．直感的にそう思った。）

すぐに役員室へ来るように連絡が入る．．．天谷から報告書を受け取りエレベーターに乗る．．．

（今頃 彼女．．．どうしているだろう？）（こんな時にも彼女のことを考えてしまう．．．左手を握り締める．．．

「堤です．．．失礼します．．．」役員室へ入る。

役員へ説明し事態が切迫していることを認識する．．．

「じゃあ．．．悪いが．．．日曜日にとんでくれ．．．」

ストックホルムへ．．．そして別れの手紙

「はい．．．わかりました」

私は急遽委託工場のあるストックホルム郊外への出張を命じられた。デスクに戻り天谷に航空券の手配を頼む．．．「日曜の便ですか．．．」

「出来るだけ早い便で頼む．．．」

「なぜ部長が行かなきゃならないんですか？部長が．．．悪い訳じゃないのに．．．」

「．．．仕方ないさ．．．誰かが行かないと．．．自分にそう言い聞かせる。」

天谷の悔しそうな顔を横目にPCを開き出張の準備をする．．．

今回の出張は長期になりそうだ．．．妻の携帯にも一応 長期出張になったことをメールする．．．

（たぶん 返信はない．．．だろう）

「4月17日の便 予約しました．．．法兰克福ト経由になります」

「ありがとうございます」

それよりも私は彼女のことを気掛かりだった．．．

鶴岡八幡宮 二の鳥居の下で手を振っている彼女の姿が頭の中から離れない．．．

その夜 彼女のウオールに書き込みをする．．．

<鎌倉．．．誘ってくれてありがとう とても楽しかった。

途中で会社に戻ってしまって．．．申し訳ない 急な出張で明日からストックホルムに行くことになった．．．たぶん長期になる．．．

帰ったら また鎌倉 行ってもいいかな？> 出張はたぶん1週間以上になるだろう．．．

（誕生日はストックホルムか．．．）クローゼットから一番大きいスーツケースを

出して出張の準備をする．．妻と子供たちはリビングでテレビを観ているのか？

笑い声が聴こえてくる。日曜の朝．．予約していたタクシーが家に来た．．

特に見送りもなく、タクシーで駅に向かう．．電車を乗り継ぎ成田空港へ到着する。

チェックインを終えてラウンジでfacebookを開いて見る．．返信があった。

<私の方こそ 楽しかったです (´・`・*) いろいろ ありがとうございました。>

また鎌倉来てください 待っています ストックホルムですか．．遠いんですね。

お身体お気をつけて 行ってらっしゃい ム(*´・`・*)>
私はまた彼女のいる鎌倉へ行くことだけを願って 成田を後にする．．．

機内で数時間ぼんやり過ごす．．(彼女は今 幸せ なのだろうか？)

(唐突にそんなことを考えてしまう．．(今の私は．．彼女のために何が出来るのだろうか？)

そんな空想を広げる．．機内の窓は沈みゆく夕日でオレンジ色に染まっていった．．

フランクフルトを経由して目的地 アーランダ空港へ降り立つ．．

「ふう〜」さすがに疲れる。空港では現地スタッフが迎えに来てくれていた．．．

休んでいる時間はない．．車でストックホルム市内へ向かう中で 今回の問題点を整理する．．

今回の交渉は．．厳しそうだった。
「堤部長．．ストックホルムに転勤って．．本当ですか？」

「いや．．．そんな話あるのか？」

「．．．いえ．．．あくまでも噂ですから．．．すみません」

ストックホルム市内のHOTELにチェックインして明日に備える．
夕食はHOTELのレストランで軽く済ませます．．．ストックホルムでもいつものようにバスタブにお湯を張る。

さすがに疲れていたのか．．．風呂から上がるとすぐにベッドに入り深い眠りにつく。

次の日の朝 早起きして市内を散策する．．．（ストックホルムは10年ぶりか．．．）

10年前と変わらず水の都ストックホルムは美しかった．．．
こうして のんびり出来るのもあと数時間だ．．．
ストックホルムでのタフな交渉が始まった．．． 案の定 先方との交渉は難航し

時間だけが過ぎていく．．．交渉の糸口すら見えぬまま3日間が過ぎていった。

HOTELに戻りメールを開く．．． 天谷の心配している顔が目

に浮かぶメールが毎日届いていた．．．
facebookを見てても特に書き込みはなかった夕方 気分転換に ひとり街に出る．．．

夕暮れの空を見上げる（彼女は今なにをしてるんだろう．．．
）明日からはまたいつ終わるともわからない交渉が待っている．．．

彼女に逢いたいと想えば 想うほど寂しさが私を包んでいった．．．
交渉5日目．．．絡み合った糸を1本また1本と解いていく．．．
根気のいる交渉．．．

東北人の私は幾度となくこういった交渉を重ねてきた。

夕方になり やっとお互いの歩み寄るタイミングが一致して 夕食の席を一緒にしながら

最終合意に至った．．． 握手をして ワインで乾杯する少し酔っ

て・・・HOTELに戻り

バスタブにお湯を張る・・・（長かった・・・今回は本当に・・・しんどかった）

facebookを開く・・・彼女からの書き込みがあった

<堤部長 お誕生日おめでとございますCongratulationsions!!（*^。^） Wink!

ストックホルムはいかがですか？ ちゃんと食事取れていますか？

野菜もちゃんと食べないと！無理しないでくださいね >いつものように質問攻めだ・・・

でもそうやって心配してくれる彼女の存在が今 私の生きる力になつていた。

（そうか・・・誕生日・・・か） ここ数年祝ってもらったこともなく

自分の誕生日を忘れることさえあった・・・ 返信するくありがとう（。；）ゞ

ストックホルムは10年ぶりです。何度来ても 本当に美しい街です・・・

今朝散歩して撮った写真送りますね。仕事は何かなりそうですが今月いっぱい

スウェーデンに滞在することになりそうです>
<帰ったら・・・>（やめておこう・・・）帰ったらまた鎌倉へ・・・

書かずに返信する。
交渉を終えた後 スウェーデン 国内の工場を回るようにとメール

で連絡があった。
（いよいよ・・・転勤か・・・）ストックホルムへ戻ったのは5月

2日だった・・・
役員からは5月9日に会社し報告するようにメールが入っていた。

帰国前に彼女へのお土産を探しに街へ出る・・・ガムラスタンの街を歩き回り

古い画廊の前で1枚が目止まる・・・

まるで 魔女の宅急便にでも 出てきそうなガムラスタンの美しい街を描いた1枚の絵．．

（これにしよう．．．）この美しい街並みを描いた絵を彼女のために買い求める．．．

翌日はストックホルムから車で5時間ほどかけクリスタルブランド KOSTA BODA の

ガラス工場の見学に連れていってもらった。

そこで ひときわ目立つキャンドルスタンド Snow Ball を2個注文する。

1つは自分に．．もう1つは彼女へのお土産だった．．．

こうして1日しかないスウェーデンでの休暇は 彼女へのお土産探しに費やされた。

それは私にとつて とても幸せな時間だった．．．

明日はやつと日本に帰れる．．HOTELのレストランでひとり食事を取ることにする．．．

思えばストックホルムに来てまともな 食事をしていなかった．

10年ぶりに食べる

スウェーデン料理はどこか懐かしかった。（今夜 彼女に連絡しよう．．）逢えない時間が

逢いたい気持ちを強くしていった．．そして彼女の存在の重さに気づく

<こちらでの交渉がやつと終わり明日帰国します もう5月なんです
ねwー；。ロ。ーw

日本はゴールデンウィークですね．．．ストックホルムでお土産
買いました。

今度 逢ったら渡します．．．9日には入社します スtockホルムも春らしくなってきました．．．>

今日撮った公園の写真を一緒に送る。

帰国前．．．空港でメールチェックをしていると彼女からの書き込みがあった．．．

<堤さん お土産 ありがとうございます 楽しみに待っています。

堤さん . . . 私に . . . ひとりじゃないよって言ってくれましたね 本当によれしかった。

堤さんも . . . ひとりじゃありませんから . . . > 短い文面にもものすごく不安を感じる . . .

(ひとりじゃない . . .) 言葉とは裏腹に彼女がどこか遠くに行つてしまいそうで . . .

一刻も早く日本に . . . 彼女に逢わなければ . . . そう心が叫んでいた。

ストックホルムからフランクフルト経由で成田に着く . . . スカイライナーで急いで帰宅する . . .

東京はすっかり春から初夏へと季節が移り変わっていた . . . またいつもの日常が戻る . . . 会社からは9日月曜日の出社でいいと言われていたが彼女の

ことが心配で . . . 6日金曜日 10時過ぎに会社へ向かう . . .

「あつ堤さん . . . 会社辞めちゃったのかと思いましたよ」

「 . . . 長期出張だね . . . 」

「 B L T とホット グランデを . . . 食べてくから . . . あとこれお土産 . . . 」

「ありがとうございます . . . また飲みに行きましょうね . . . 」

「ああ . . . その内 . . . に」彼女へのお土産 . . . が思いの外 嵩張る . . .

少し気持ちを落ち着かせエレベーターでデスクへ向かう . . . 「堤部長、お帰りなさい！」

天谷がすぐにやってくる . . . 「これ . . . お土産 . . . 大したもんじゃないが . . . みんなで」

ストックホルムで買ったクッキーの詰め合わせを手渡す . . .

「ありがとうございます 月曜 出社って聞いていたので．．」
「ああ．．いろいろあって．．」

10m 先の彼女の方へ視線を向ける．．彼女の姿はそこにはなかった．．（いない．．）

「ストックホルムどうでした？ 交渉上手く行ってよかったですね
くさすが．．堤部長．．．」

彼女を探す．．（休み．．か？）例えようのない不安に襲われる．．
．．
「誰か？探してるんですか？」
「えっ っいや．．．」

天谷の機関銃のような質問攻めからやっとなげ出し役員へ．．
今回の出張報告をするためだ．．
一通り報告した後 ストックホルムへの転職の話は白紙に戻したことを告げられた．．

「そうですか．．わかりました．．」交渉が軌道に乗ったことで私の役目は終わったようだった．．
デスクに戻る．．やはり彼女は出社していないようだった．．彼女へのお土産を一先ず

ロッカーへ入れる．．20日ぶりに戻ったデスク．．PCを開き
オフィスを眺める．．

ストックホルムの出張などなかったかのような風景．．しかし
街は桜が散り新緑に包まれて

季節が変わったことを告げていた．．facebook を開く．．
．．
彼女からの返信はなかった．．ウォールに書き込む．．

<20日ぶりに出社しました（*．．）ノ 今日はお休みですか？
出張前に会社から転職の話が

あって でも今回の長期出張の結果で白紙に戻ったみたいですが．．
鎌倉も新緑が美しいですか？

月曜日 お土産渡しますv（*．．^*） - >

月曜日・・・早速ミーティングの予定が入る・・・
出張の残務整理でデスクに戻れたのは19時近くになっていた・・・

(さて・・・帰るか・・・)

ゴールデンウィークでインターシティの中も閑散としている・・・
外に出て空を見上げる・・・月も濁って見える TOKYOの夜・・・
帰って来たことを実感する。

品川駅に歩き出すが・・・どうしてもすぐに帰る気にはならなかった・・・

(ビールでも飲んでくか・・・)

いつものイングリッシュパブへと駅と反対方向へと歩き出す・・・
店は思ったより客が少なく

奥のテーブルに案内された。

「バスペールエルとコブサラダを・・・」ひとり・・・乾杯する
くうく (旨い・・・)

(そういえば・・・3月にここで天谷とばったり・・・)

そう思った時・・・「部長く堤部長く」左奥のテーブルから天谷の
声が聴こえる・・・

(まさか・・・また・・・) 天谷が3杯目のビールを飲み干すと
ころだった・・・

「天谷・・・ひとりか？」

「ひとりじゃ悪いですか？」

「いついや・・・問題ないが」

「そっち・・・行っていいですか？」

「あっ・・・ああ」こうして また天谷と飲むことになった。

5杯目のビールを注文して天谷が真剣な目をして私に詰め寄る・・・

「私のどこが・・・どこがいけなんでしょう？」

「いけないところなんて・・・ないさ・・・」

「だったら・・・部長が私のこと・・・もらってくださいよお」

(まずい・・・完全に酔っ払っている・・・)

「部長．．．好きな人いるでしょ？」

「えっ．．．」

「．．．知ってますよお 私．．．」

「あ天谷．．．そろそろ帰ろうか」

「やだ．．．いやです」「そう言って5杯目のビールを一気に飲み干した。

「送っていくから．．．」天谷がこんなに酒癖が悪かったとは．．．

「グレンファークラス．．．ロックで．．．」私の話など聴いていない．．．（グレン．．．）

スコッチウイスキー 46度もある．．．今日はとことん付き合う羽目になりそうだ．．．
そう覚悟を決める。

「堤部長はズるいですよ．．．自分だけ．．．」

（ズるい．．．？自分だけ？って．．．さっぱりわからん．．．）

「ストックホルム．．．行っちゃうんでしょ．．．」

「ああ そのことか．．．」

「私．．．どうしたらいいんですか」「（どうしたらって．．．）
そんな天谷の話を聴きながら

．．． 私たちは閉店時間の深夜12時まで飲み続け．．．天谷を
横浜の自宅までタクシーで

送ることになった．．．

「大丈夫か？」

「．．．」天谷は気持ちよさそうに眠っていた。「ふう．．．」

天谷の自宅には数回立ち寄ったことがあった．．．（確か．．．このあたり．．．

母親と二人暮らしのはず．．．だったな）

「運転手さん ここで停めてください．．．ちょっと待っていて貰えますか」

天谷を起こして タクシーを降りる．．．「天谷．．．大丈夫か？」

「ん．．．どこですか．．．ここ」 2軒先に天谷と書かれた表札を見つける．．．

人影も見えない．．．深夜1時 インターフォンを押す．．．天谷のお母さんが出てくる．．．

「あらあ 堤さん．．． すみません．．．由佳たら こんなに飲んじゃって．．．」

お母さんとふたりで玄関まで天谷を連れて行く。

「堤さん．．．本当にすみません．．．あとは大丈夫ですから．．．ありがとうございますました」

「いや．．．じゃあ私はこれで．．．失礼します」待たせていたタクシーに乗り横浜を後にする．．．家に帰ったのは深夜3時近くだった。

週末はゴールデンウィークに長期出張だった罪滅ぼし？なのか銀座に買い物につきあわされた後．．．夕食は鮎屋に行く．．．そこで 些細なことで妻と言い争いになる．

いつもは私が黙り込み我慢するのだが．．．今夜は私も反論し静まり返った店内に

妻の声が響き渡る．．．そして 妻が凍った表情で．．．私の目を見て言った．．．

「だったら．．．別れた方がいいじゃない．．．今だって．．．」妻はそれ以上話さなかった。

「そうだな．．．」 そう言って 私は黙って下を向いた．．．会計を済ませお互い無言のまま家に帰る。

シャワーを浴びベッドに入る．．．リビングでは妻と子供たちの話し声が聴こえた。

翌朝 いつもより早起きして駅へ向かう．．．駅まで続く新緑の桜並木．．．昨夜の妻の「別れた方がいいじゃない

い．．．」

の一言が思い出される．．．（もう引き返せない．．．）
いつものようにコーヒーとBLTをもってデスクに着く。

facebook を開く．．．彼女からの返信はない。9 時近く
オフィスの彼女の姿は見えない．．．

朝のミーティングへ向かう．．．（今日も．．．休み．．．か）

10 時からはスウェーデン出張の報告を兼ねたミーティングが
昼まで入っていた．．．

（何かあったのか？）不安が募る．．．「昼食．．．一緒にどう
ですか？」

天谷が申し訳なさそうに言ってくる．．．

「今日は．．．私をご馳走しますから．．．」「どうやら先週のこと
を気にしているようだった。」

「じゃあ つばめKITCHENでも行くか．．．」「そう言ってふ
たりで品川駅の方へ歩き始める．．．

「堤部長．．．先週は本当に．．．申し訳ありませんでした．．．
私．．．」

「大丈夫 問題ないさ」

「私．．．途中から．．．ぜんぜん記憶なくて．．． なに言っ
ちやっただか．．．」

つばめKITCHEN に着いて ハンブルグステーキセットを注
文する。

「そういえば．．．部長．．．転勤の話なくなっただって．．．本当です
か？」

「ん．．．」トマトサラダを頼張る．．．トマトは少し苦手だがここ
のサラダは旨い．．．

「ああ．．．白紙に戻った．．．」

「そうですね．．．よかった．．．」

「ストックホルムも悪くなかったけどな．．．」

「部長が出張中大変だったんですよ」

「そうか．．．」

「そうなんですよ。せっかくチームとして機能してきたっていうのに．．．コンプラの．．．」

柴咲さんも急に辞めちゃうし．．．」（辞めたって．．．柴咲）
ベイクドポテトがフォークから抜け落ちる．．．」．．．「一瞬間
葉を失う。

「彼女ががんばっていたのに．．．やっぱりTempってわかんないで
すよねえ．．．」

そう言つて天谷はロールキャベツを平らげた．．．その後の天谷の
声が全く耳に入つてこない．．．
行き場のない想いが．．．私の胸を締め付ける

「．．．堤部長 聴いてます？」

「。。。 ああ．．．」（辞めた．．．私の出張中に．．．）（なん
で？どうして？．．．）

ハンブルグステーキを残しデスクに戻る．．．誰もいない彼女の席
に目をやる。

（どうして．．．なにがあつたんだ．．．どうして．．．）PCを持
つてスタバへ向かう。

「こんにちは．．．堤さん」「．．．チャイティ ラテ．．．グラ
ンデを」

「チャイラテ グランデ．．．」

待っている間．．．店長が話しかけてくる 今の私には何も受け入
れられない．．．

「あつ 堤さんに渡してつて預かっていたものあるんですよ」

「．．．」

「これ．．．」店長が差し出した きれいな青い包みに黄色いリボ
ン．．．

まるでスウェーデンの国旗のようだった。（なんだ．．．これって．．．
）

「以前 堤さんのドリンクの好み訊いてきた女性がいたでしょ．．．

確か．．．柴咲さんって．．．

彼女に堤さんが出張から帰ってきたらどうしても渡しして欲しいって．．．

本当はこういうこと しちゃいけないんですけどね．．．」

（彼女が．．．）「ありがと．．．席に戻って包みを開けてみる．．

．（手紙．．．）

そこにはブルーのエッフェル塔のストラップが入っていた．

（あっ．．．彼女と色違い．．．の）手紙を読む．．．

< 堤さん お誕生日おめでとうございます。 スウエーデンでのお仕事は順調ですか？

いつもの調子で「問題ない！」って言っているのかなあ．．．

Facebookでと思いました但最终はお手紙にしました．．．

プレゼント何にしようかなって ずっと考えてたんですが．．．

今度 買うよって言っていたスマートフォンに付けて欲しくてこのストラップにしました。

（私とお揃いですよ）直接お渡ししたかったけど．．．出来そうにありません ごめんなさい。

堤さんと肩を並べて歩いた鎌倉の段葛の桜並木．．．私の手を強く握り返してくれたこと．．．

「ひとりじゃないよって」「言ってくれたこと．．．あの日のことずっと忘れません。

お仕事あまり無理しないで．．．お身体お大事に さようなら 柴咲
亜美

きれいな字で書かれた手紙を何度も 何度も読み返す．．．

「堤さん．．．大丈夫ですか？」店長が私の顔を見て．．．心配して声を掛ける．．．

「．．．ああ．．．」エッフェル塔のストラップを手に取る．．．

（彼女のは．．．真っ赤だったよな．．．）チャイティ ラテを持ってデスクに戻る．．．

「天谷．．．早退する．．．から」

「えっ．．．部長．．．まだミーティングが．．．」

「進めておいてくれ．．．」そう告げて会社を後にする。品川駅へ向かって歩く．．．

初夏のような陽気に汗ばむ．．．改札を抜けて横須賀線 15 番線ホームへ駆け降りる．．．

やってきた久里浜行き of 電車に飛び乗る．．．

心臓の鼓動が早くなる．．．（どうして？）を呪文のように繰り返す．．．

車窓から流れる少し見慣れた風景もずっと ずっと昔のように思える．．．

橋を渡って住宅街と倉庫街の入り混じった川崎の街を過ぎ．．．電車は横浜の街へ入って行く。

大船を過ぎてから鎌倉の山並みが見えてくる．．．彼女がいなくなってしまう．．．

その怖さと寂しさに．．．追い詰められる。

鎌倉駅のホームに立つ．．．彼女と桜を見たあの日以来．．．改札を抜けて駅正面に出る．．．

初夏の日差しが照るつける．．．真つ青な青空（あつ．．．自転車）

スタバの前の駐輪場に向かう．．．自転車は見つからない．．．（あれから1ヶ月だもんな．．．）何をしに．．．鎌倉まで来たのだろうか？

（あの時 なぜ彼女の手を離してしまったのだろうか．．．自分に少しの勇気があれば．．．）

そう自分を責める．．．私にとって 彼女はかけがえのない存在になっっていた．．．

気づくと彼女と歩いた段葛をひとり意味なく鶴岡八幡宮に向かつていた．．．

こんなに近くにいるのに．．．逢いたくても 逢えない．．．すれ違う気持ち．．．

ふたりの距離が遠ざかっていく．．．逆らうほど 逢いたくなる．．

新緑の段葛をひとり歩き．．．駅に引き返す．．．（帰ろう．．．
そして．．．決心する）

18時過ぎ．．．こんな時間に家に帰るのは何年ぶりだろう？鍵を
開けて玄関に入る．．．

「ただいま．．．」（だれもないのか．．．）スーツを脱ぎソフ
アールでTVを付ける．．．

NEWSでは原発事故関連の暗いNEWSばかり．．．しばらくす
ると玄関のドアが開く音が聞こえる．．．

「帰っていたの．．．これ．．．」そう言っ 妻は無表情で封筒
を差し出す．．．

封筒には離婚届けが入っていた．．．妻の印鑑はすでに押してあつ
た。

子供たちは無言で2階の部屋に上がっていく．．．どうやら実家に
行っていたようだ。

私の方から話を切り出す間もなくもう 結論は出ているようだ．．．
「親権は私が．．．あと この家の処分頼んだわよ．．．」「ああ

．．．」
これが 17年間 連れ添った夫婦の幕引きだった．．． 深夜

彼女のウォールに書き込みをする．．．
<元気ですか?．．． 今日 会社辞めたこと聞きました 驚き
ました．．．

大丈夫ですか?心配しています。私は転勤もなくなりまた来週から
札幌へ出張です。

誕生日プレゼント ありがとう すごくうれしいです。ストラッ
プ 今度買っ

スマートフォンに必ずつけます (＃＼) できたら．．．
一緒に選んで欲しい 話たいこと．．．

いっばいあります > 次の日も また次の日も彼女からの返信はな

かった。

そんな中・・・家の売却も決まり・・・住宅ローンの決済など離婚に向けての手続きで

あっという間に1週間が過ぎていった・・・彼女からの返信はない・・・

また ウォールに書き込む・・・

<ストックホルムのお土産もデスクの下にあります・・・北海道のグリーンアスパラも・・・

私は相変わらず出張続きです もうすぐ七夕ですね・・・>

その後も彼女からの書き込みはなかった・・・逢いたい思いのまま逢えない時間だけが過ぎてゆく・・・

もう叶わないものならば・・・いつそ忘れてしまおうと・・・

出張のスケジュールを 無理にタイトにする・・・ 7月20日

家の引渡しの日

ガランとしたリビングを見渡す・・・約10年住んだ家・・・ 17年の結婚生活・・・

明日から始まる新しい生活・・・彼女は「ひとり なんかじゃありませんよ」

つて言ってくれたけど・・・この世界でひとり取り残されたような・・・

抱えきれない寂しさに包まれる。

玄関の鍵をかけ 品川のHOTELに向かう・・・ 引き返せない

新たな道を歩み始める。

(しばらくはHOTEL 暮らしか・・・)

「堤さん・・・」スタバでコーヒーを飲んでしていると 突然彼女が私の左肩を叩く・・・

振り返ると 桜を観に行った時と同じ白いワンピース・・・そして

こぼれそうな笑顔・・・の彼女が・・・

「逢いたかった・・・」彼女を強く抱きしめる・・・

(・・・夢?・・・か・・・)彼女を本当に強く抱きしめたような・・・

そんな感覚だけが両腕に残っている．．．HOTELのバスタブにお湯を張る．．．明日 久しぶりに休暇を取って鎌倉へ行く。私は鎌倉に住むことにした．．．彼女が生まれ育った街 鎌倉に．．．いつか 彼女に逢えるかも．．．そんな未練がましい想いもあったのは確かだが．．．私は本当に鎌倉という街に

心底 恋をしていた。

真夏の日差しが眩しい．．．今年も猛暑になりそうだ。汗だくになりながら検索した

物件を見て回る．．． 8件目に見た 長谷寺近く3階建ての角部屋のマンションに決めた．．．

日当たりも良く 由比ヶ浜まで徒歩5分．．． 契約を済ませ 引越しの準備をするため

夏休みを利用して鶴岡の実家に帰ることにした。

離婚をすることは電話で両親に伝えたきりだった．．．田舎者の両親は自分自身で決めたことなら．．．
と言っただけだが電話の向こうで相当ショックを受けていたに違いない。

生まれ育った鶴岡の街は私を優しく迎えてくれた．．．

(鶴岡．．．一度行ってみたかったな．．．) 彼女の言葉を思い出す。

数年ぶりに見る 庄内平野に広がった 夏の田園は 私の死んでしまった心を蘇らせてくれる．．．

(今年も豊作だな．．．) 「今度 鎌倉 案内するよ．．．」 そう両親に告げて 山形を後にする．．．

(8月も もうすぐ終わりか．．．) 緑の田園風景を写真に収める．．．

彼女はきつとどこかでこの写真を観てくれている．．．そう信じて facebookに写真をアップする．．．

(鎌倉に引越すこと．．．まだ言っていなかったな．．．離婚のこ

とも．．．)

庄内空港のロビーで書き込むく鶴岡に来ています．．． 元気ですか？

いろいろあつて 引越しをしました 鶴岡じゃないですよ．．．

庄内平野の稲穂はこんなに

元気に育っています．．． 今年も豊作です！>．．． 結局 鎌倉に引越すことは言えなかった．．．

もう自分の気持ちを彼女にさらけ出してもいいはずなのに．．．

どうしても彼女に逢って直接伝えたい．．． そう思った。

こうして私の短い夏休みは終わった．．． 週末 山形から荷物が届く．．．

ダンボールの中には野菜が山のように入っていた．．． (どうすんだ．．． これ)

でも家族の気遣いが嬉しかった。練馬からの荷物はベッドとダンボール箱3個．．．

とスーツケースだけだった。

こうして私の鎌倉での新しい生活が始まった．．．

(ひとり暮らしをするのは．．． 16年ぶりか．．．) それも今まで住んだことなどない街

彼女が大好きって言っていた鎌倉．．．

コンビニから買ってきたビールを開け 一人きりの祝杯？をあげる．．． 窓から気持ちいい

海風が入ってくる．．． スーツケースから明日着ていくスーツとワイシャツを出す．．．

(あっ．．． クリーニング屋 探さないと．．．) クローゼットにスーツをかけて．．．

バスタブにお湯を張る．．． まるで出張先のHOTELに宿泊しているようだった．．．

窓を開けて夜空を見上げる．．． 今まで家の窓から星など見たことがなかった．．．

鎌倉の街から見る星は優しい光を放っていた．．．

（ 同じ星空を彼女も見ているといいけど．．． ）
朝早く目が覚める．．．まだ5時．．．一瞬自分がどこにいるのか
？わからなくなる．．．

（ 鎌倉．．． ）Ｔシャツに着替え 海に散歩に出る．．． 登っ
てくる朝日を全身に浴びる．．．
生きているって実感が湧く瞬間．．．こんな気持ちになったのも．．．
．彼女と出逢ったから。

波の音が心地いい 犬の散歩をしている人．．．ジョギングをして
いる人．．．意外と人が多かった。

30分ほど散歩をして部屋に戻る．．．シャワーを浴びて出勤の準
備をする．．．

鎌倉からの初出勤．．．まだま暑い 朝6時の気温は29度．．．

（ 鎌倉駅まで歩くと約 30分か．．．無理だ．．． ）この暑さで徒
歩は早々に諦める。

長谷駅まで歩き江ノ電で鎌倉駅に向かう．．．なんだか遠足みたいで
ワクワクする。

鎌倉駅までは由比ヶ浜 和田塚と約 5分ほど．．．鎌倉駅に着くと
通勤客がJRへ乗り継ぐ後に
私もついて行く。

ドラマティックな出来事は起こるはずもない．．．
平凡を生きてきた私が離婚して 鎌倉にひとり住んで．．．こ
うして会社に通っていることが

信じられなかった．．．
ホームに立って辺りを見回す．．．もしかして彼女が．．．そんな
期待を抱きながら．．．
電車がホームに入ってくる。

彼女を追って少し見慣れた車窓からの風景も．．．今日から毎日続
く通勤の風景にかわる．．．
なんだか不思議な感じがする。

またいつもの日常が戻ってきた．．．「おはよう．．．」「おはようございます 堤さん

いつものでいいですね!」「いつものようにコーヒーとBLTを持ってデスクに向かう．．．

朝のミーティングから戻ると10 m 先のデスクには新しいteam p の女性が座っていた．．

柴咲亜美など最初から 存在しなかったかのような．．．そんな錯覚すらおぼえる．．．

でも彼女は確かに10 m先のデスクに座ってこちらを見て微笑んでいた．．．

そして私はそんな 彼女に恋をした それは間違いない真実だった．．

だって私は今 鎌倉に住んでいるのだから．．．

私はfacebookに書き込みを続ける．．．

彼女の娘「遙」からの返信

それでも彼女からの返信はなかった．．． 募る想いをfacebook
o o kに綴っていく．．．

ため息ばかりついている日常が過ぎていく．．．facebook
に書き込みは続く．．．

<札幌はだいぶ涼しくなりました．．． 広島でのランチは好み
焼きでした．．．

写真送ります．．．旨そうでしょうへ)。、*ノ．．．元気
ですか?．．．>

逢えなくても 返事がこなくても彼女のことを忘れることはなかつ
た。

鎌倉でも生活にも徐々に慣れてくる．．．(やっぱり．．．自転車
いるよな)

週末 またあの自転車屋に行ってみる．．．田村自転車店．．．「
こんにちは．．．」

「はい．．．いらっしやい」
「あの〜」そう言つと店主が「あゝあの時の．．．」と驚いた顔で

店から出てきた．．．
「堤さん?ですよね．．．」

「はい．．．」
「よかつたよお あなたの買った自転車届いてるよ．．．」

「えっ」
店主が奥からあの青いフレームの自転車を出して来てくれた。

「うちのシール貼つてあったから 誰か届けてくれてね．．．」
「ありがとうございます．．．ございます」想い出の自転車が戻ってきた．．．

「なんかあつたら また来なよ」
「はい．．．」自転車に跨り．．．駅に向かう とめどなく涙が溢

れてくる．．．

戻ってきた自転車で街を散策する．．．馴染みの八百屋も見つけた
おかみさんが同じ山形出身で．．．

「このジャガイモ．．．食べて おまけね」

「いつも ありがとうございます」

「ちゃんと 食べてんの？」

「はい．．．何とか．．．」

こんな買い物していると．．．彼女とばったり逢えたり．．．そんな期待をしている自分がいる．．．

晴れた日は 鎌倉駅までは自転車で駆け下りる 電車に乗ってる時も 彼女が乗ってるかも．．．
そんなことを思い辺りを見渡してしまふ。

雨の日は 江ノ電で鎌倉駅まで向かう．．． そんな生活が私の心を癒していく．．．

でも見つからないパズルの欠片のように．．．自分の無力さを思い知る．．．

私の時計はあの時から止まったままだった。

休日は由比ヶ浜へ散歩に行くのが日課になっていた．．．海を眺めていると心が安らいだ．．．

ある日 犬を散歩している女の子とすれ違う．．．（あつ秋田犬．．．）

その犬は 私の方へやってきて尻尾を振る．．． 女の子は微笑んで 軽く会釈して立ち去った．．．

彼女からの返事がなくてもfacebookは続けた．．．<元気ですか？．．．

ひとりきりのFacebookに言葉を綴っていく。<秋ですね．．．空が高くなりました．．．>

季節は移り行く．．． 鎌倉と品川を往復する日々が過ぎて行く．．．人ごみを歩いていてもふつと感じてしまう孤独．．．（あつ．．．

彼女？）朝 電車の中で彼女に似た人に出逢う．．．
（違った．．．なんで．．．どうして．．．返事くれないんだろう．．．

．．．どうしようもなく．．．
切なくなる。

私の心の声は彼女には届いているのだろうか？また　ため息をついてしまう．．．

そんな毎日．．．なぜか仕事だけは順調で．．．満たされていないのに．．．彼女に鎌倉に住んでいることを伝えよう．．．ためらいながら．．．一歩踏み出そうと決心する。

10月．．．彼女の誕生日が近づいていた．．．

<元気ですか？　変わりありませんか？あれから　いろいろあって．．．

．．．私も大好きになつた街　鎌倉に

引越してきました。長谷寺の近く．．．

毎朝　自転車で鎌倉駅まで通っています．．．　鎌倉は　本当に

いい街ですね　いつか鎌倉の街　案内して

ください>

会社からの帰り道．．．　花屋の前を通り掛る．．．　きれいな花々が店先を飾っている。

「プレゼントですかあ？」立ち止まっている私に　若い店員が声をかけてくる．．．

「．．．　いいや．．．」「どうぞ入って見てください」半ば強引にお店の中に入れられる．．．

「配達もしていますので．．．」花のなんとも言えない自然界の甘い匂いが店内に充満している．．．

花屋など入るのは何十年ぶりだろうか．．．　花の名前もバラとチユーリップ

くらいしか知らないし．．．

「なにか記念日とか．．．ですか？」

「．．．　誕生日」私は小さな声でつぶやく。

「でしたら．．．　花束．．．　ぜったい喜びますよ！」

その店員はそう言って花束を作り始めた．．．　「いいや．．．今日じゃなくて．．．」

「じゃあ・・・配達しましょうか？」

「配達・・・花束・・・なんて・・・」

悩んでいる私にその店員は配達する伝票を持って来て手渡した・・・

「・・・住所か・・・」私は彼女の家の正確な住所も電話番号すら知らなかった・・・

「市内ですか？どの辺？・・・ですか？」困っている私に店員は優しく声をかける・・・

「・・・由比ガ浜3丁目・・・だった・・・かな」

「お届けする方のお名前は？」

「柴咲・・・柴咲亜美です・・・」

「・・・柴咲 ああ知ってます・・・ お届け日は？ 由比ガ浜3丁目ですよね・・・」

「10月・・・10月16日に・・・お願いします・・・」

店を出る・・・送り主は空欄にしてもらった・・・（なに・・・やっつてんだ・・・）

彼女からのface bookが途絶えてから5ヶ月が経とうとしていた・・・なんだか 未練がましい自分に・・・彼女を忘れることが出来ない自分に・・・それでもまだ・・・たとえば

いつか 彼女から返信がきて・・・鎌倉の街で再会して・・・

ふたり肩をならべて鎌倉の街を歩く・・・

そんな空想を広げたりする。

そんな日がいつか訪れるってまだ 信じている自分がいた・・・

段葛の桜の葉が色づき始め

どこからかキンモクセイの香りが伝わってくる・・・

10月16日・・・彼女の40回目の誕生日・・・彼女のウォールに書き込みをする。

<誕生日 おめでとうcongratulations!!（＊

^。^）・・・>花束のことは書けなかった・・・

<誕生日・・・どうしていますか？美味しいケーキとか・・・

食べたりしていますか？

素敵な誕生日過ぎてください > 素敵な．．．か
その夜．．．ひとり彼女の誕生日を祝って．．．部屋でワイン
を1本空ける．．．

信じられない 速さで 時は過ぎ去っていく．．．その後も 彼女
からの返信はない．．．

でも彼女のことは一時も忘れることはなかった．．．
今年も街はクリスマス色に染まり そして 新しい年を迎える．．．

前の住所から転送されてきた

年賀状が届く．．．ひとり鶴岡八幡宮に初詣に出掛ける．．．
彼女と出逢って1年が過ぎ去ろうとしていた．．．参拝して段葛を
歩いていると晴れ着姿の女性と

すれ違う．．．(彼女も初詣．．．来てるのかな．．．)

一方的なfacebookは年が明けても続いていた．．．<あけ
まして おめでとございます

鶴岡八幡宮に初詣に行ってきました．．．聞いていた通りすごい
賑わいですね >

<鶴岡から 雑煮の食材が届いて．．．自分で作ってみました 写
真送ります 庄内の雑煮は丸餅で岩のりがたっぷり入ってるのが特
徴です 鎌倉の雑煮はどうですか？ >

正月休み明け．．．いつもと同じ毎日が始まる．．．
会社の新年会があつて．．．新しい年がスターとする．．．彼女の
存在がどんどん失われていく．．．
ような．．．寂しさを覚える。

時は流れ．．．また 春がやってきた。自転車で鎌倉駅に向かう途
中の桜並木の蕾がふくらんできた．．．

先週やっとスマートフォンを購入した。いまいち使い方に不安が
あるが．．．通勤途中にアプリを検索する．．．

(彼女はスマートフォンで何を見ていたんだろう?) 真新しい
スマートフォンには昨年の誕生日

彼女からプレゼントされたブルーの エッフェル塔 ストラップ
が揺れていた．．．

デスクでテイクアウトしたコーヒを飲んでみると天谷がレポート
を持って来た．．．

「部長 おはようございます！あれっ．．．そのストラップ．．．」
天谷が何かを言いかけて立ち去っていった（ん？何だ．．．）社内
では私が離婚したことは伝わっているらしい．．．皆 気を使ってる
のか？そのことについては誰も触れようとしなかった。

今年も数十人の新入社員の研修が始まる．．．何も変わらない．．．
彼女がいなくなったことを除けば．．．

4月6日金曜日 鹿児島からの出張帰り 鎌倉駅から歩いて段葛へ
寄り道をする．．．

「キレイだ．．．」暗闇の中に浮かぶ夜桜は息を呑むほどに美しく
った．．．

「なんで．．．あの時．．．離してしまっただろう．．．」

私はあの時 彼女の手を離したことを今でも 後悔していた．．．
もし あの日 彼女の手を離さずに握っていたら．．．今は違ってた
いた．．．

ずっとそのことで 自分をずっと責め続けていた．．．（時が巻
き戻せたなら．．．）

夜桜をぼんやり眺めながら歩く．．．目を閉じれば浮かんでくる
．．．あの日のふたり

（もう．．．二度と 逢えないのかな．．．）願いに少し疲れたの
かも．．．

駅まで戻って自転車で帰る．．．空には霞んだ月が浮かんでいた。
「ただいま．．．」誰か返事をしてくれるはずもなく．．．真つ暗
な玄関に入り下駄箱の上に鍵を置く。

出張先の鹿児島から買って来た 有村屋のさつまあげと缶ビールの
プルトップを開ける．．．
窓を開けると春の海風が潮の香りと一緒に部屋に入ってくる。

さつま揚げを一口食べてビールを飲む．．．（はあく最高にうまい）
スマートフォンでfacebookを開いてみる．．．（えっ．．
．）テーブルの缶ビールが倒れる．．

（あつやばい．．スマホ．．．）危うくこぼれたビールの上に落ち
そうになる．．．

（うそ．．．）
facebookに書き込みがある．．．心臓の鼓動が聴こえるく
らい強く．．．早くなる。

湧き出る感情を出来るだけ抑えながらfacebookのウォール
を開く．．．彼女からの書き込みだった．．

精一杯の息を吸って．．．「ふう〜」吐き出す．．．そして
スマホに顔を近づける <堤さん．．

逢いたいです > そう ひと言だけ書かれていた．．．
逢いたい．．．逢いたい．．．そう思っていたのは私だけじゃなか
ったか．．．

待っていた彼女からの返信のはずが．．．言葉が見つからない。（
しっかりしろ．．．）

どうしようもなく．．．彼女に逢いたいはずなのに．．．新しいビ
ールを持って部屋を出る。

歩いて由比ガ浜へ向かう．．．浜辺に座って新しい缶ビールのプ
ルトップを開け一気に飲み干す．．．

（なんで．．．今まで）そんなことはもうどうでも良かった．．．
もう一度画面を見る．．．

（逢いたいです．．．か）
今の私には彼女との想い出 以外何も残っていなかった．．．だか
ら 今度こそ 彼女と正面から

向き合いたいと思っていた。

海の向こうに霞んだ月が見える．．．遙かな月日のわだかまりを潮
騒がを洗い流してくれている。

浜辺でfacebookに返信する．．．彼女はきっと 私が鎌

倉に住んでいることを知っている・・・

<こんばんは・・・ご無沙汰しています・・・> (硬いな・・・削除)

<こんばんは 久しぶりですね 元気でしたか？返事なかったからすごく 心配していました・・・

逢いたいです 逢って伝えたいこと 聞いてほしいこと たくさんあります>

これが今の私の素直な気持ちだった。

部屋に戻り ベッドに入るが・・・眠れない・・・深夜1時過ぎPCを開く・・・書き込みはない。

結局 朝方まで眠れなかった・・・着替えて海岸を散歩する・・・今日もいい天気だ。

(あつ・・・)この前の女の子が犬を連れてこちらへやって来る・・・また犬が私を見て尻尾を振って

近づく。(なんだか 嬉しそう・・・)「おはようございます・・・」

女の子が笑顔で挨拶してくる・・・「おはよう・・・」
私も挨拶を返す。

(んっ・・・どこかで・・・気のせいかな)15分ほど散歩して部屋に帰り シャワーを浴びる。

いつものように自転車で鎌倉駅まで駆け下りる・・・
今日は今までと景色の色が違って見える・・・ 彼女に逢える ぞう思うだけで私の心はときめいて・・・

彼女のことです 胸がいつぱいになる。

「おはようございます あれ〜 堤さん・・・なんか良いことありました?」

店長が声を掛けてくる・・・「いや・・・別に・・・」
コーヒーとBLTを持ってオフィスへ向かう。

デスクでPCを開く・・・ 彼女からの返信があった。

<4月11日 水曜日 午前10時 鎌倉駅改札口でいかがですか

? お仕事大丈夫ですか?

無理しないでください> 久しぶりのせいか?彼女の言葉が 少し

よそよそしい...

気のせいか... すぐに返信する。

<大丈夫です 11日 必ず行きます > 逸る気持ちを抑えて

用件のみを伝える。

どれくらいの時間が過ぎたのだろうか? . . . 不思議だった あの日のことが すごく遠い日の出来事のように . . . でもつい昨日のように思い出される。

(こんなにも彼女のことを好きだったんだ . . .)

言葉に出来ずに待ちわびて . . .

やっと伝えられる喜びと 好きになればなるほど . . . 大切な彼女を失ってしまう不安をどこか感じていた。

日曜日 . . . いい天気 何かしてないと落ち着かない . . . ベットシート 枕カバーと

カーテンも . . . 部屋にあるものを片っ端から 洗濯する . . .

キッチン トイレ お風呂 家中をピカピカに磨き上げる . . . ベ

ランダで 真っ白なシートが気持ちよさそうに 春風になびいている . . .

月曜日 . . . 冷たい雨 . . . 長谷駅から江ノ電で鎌倉駅に向かう。

桜の花びらは冷たい雨に耐えて何とか

踏ん張っていた . . . (水曜日 . . . 晴れたらいいな . . .) 車窓から桜の木を眺めながらそう願う。

待ち続けた彼女からの返信が本当に 現実だったのか? f a c e b

o o k を開いてみる . . .

(あさって10時 . . .)

(明日 . . . 逢えるんだ . . .) 火曜日の夜はなかなか寝付けないでいた . . . 彼女に逢ったら何を伝えようか . . . 日曜日からそのことばかりを考えていた。

ただ 伝えたいのは あの時伝えることが出来なかった . . . 叶うも

のなら君のことをこれから守って
いきたい　ただ．．．それだけだった。

たとえ運命が変わらなくても　逢って　逢いに行って　伝えなければ．．．そう思っていた。

水曜日は久しぶりに休暇を取っていた．．．いつものように朝5
時30分に目が覚める。

ベッドでしばらく　ぼんやりする．．．

（彼女の声．．．　どんな声　だっただろう？　彼女の手を強く
握ること．．．

いつか　彼女を強く抱きしめることはできるのかな．．．）そんな
想いがめぐる．．．

いつもより熱めのシャワーを浴びる．．．そして　あの日と同じ
スーツに着替える。

お気に入りのネクタイを締め　鏡に向かって「よし．．．大丈夫
問題ない．．．」

自分に言い聞かせて　部屋を出る。

あの日と同じ．．．鎌倉の空は　澄み切った　青空で．．．春の優
しい光に包まれていた。

今年もまた鎌倉の街が桜色に染まっていく．．．時より吹く春
風はふたりの再会を祝ってくれているようだった。

私は　鎌倉駅に向かってゆっくりと歩き出す．．．彼女が私の前か
ら姿を消してから1年か．．．

逢えるんだ．．．また逢える　きっと彼女に出逢わなければ　今日
という日は違っていたから．．．

私は後悔などまったくなかった　新しい道を歩めることに感謝して
いた。

緩やかな坂道を下り．．．江ノ電の踏切を越える　この街で彼女
を．．．脚を引きずりながら歩いた交差点．．．冷たい雨に打た
れながら駆け抜けた坂道．．．

いろんな想いが幻のように浮かんでは消えていく．．．

鎌倉駅が見えてくる．．．いつもの駅とは違って見える．．．9時18分．．．

(また早く着いてしまった．．．通勤時間帯ではないからか？スツ姿は私ひとり．．．スタバに入る)

「あれっ 堤さんこれからお仕事ですか？」

「ああ．．．ホット ショートで」店長同士が知り合いでこのスタバもすっかり常連になっていた．．．「ごゆっくり．．．」
「ありがとう．．．」

(確かあの日も．．．彼女10分くらい遅刻してきて．．．あの時のことが昨日のことのように思い出)

される。お店の中がお花見客でにぎわってきた．．．「ごちそうさま．．．」

「いつてらっしゃい」待ち合わせの10時まであと10分私は前と同じように改札の前で待つ．．．

鎌倉駅に電車が着くたびに お花見客と思しき人が改札から押し出される．．．

(また彼女どこからか見てるのかも．．．)ロータリーを見渡す．．．

(自転車でくるのかな．．．)10時を少し過ぎた時 左側から白いワンピースを着た女性が走ってくるのが見える．．．(あつ．．．違った．．．)

改札の前で待つ．．．好きな人を待つことがこんなにも幸せなことなんだと．．．あらためて思う。

時計を見ると．．．10時15分．．．その時 私は左肩を叩かれる．．．振り返る．．．

(ん．．．)「堤さん．．．ですか？」

さつき走ってきた白いワンピースの．．．20歳くらいの女の子だった．．．

「あつ．．．はい．．．堤です．．．」彼女を顔を見る．．．(．．．目元が彼女とそっくりだ．．．)」

「あゝよかったあ」そう言って彼女は微笑んだ．．．(笑った顔も彼

女に．．でも．．誰．．．）

「あつ．．すみません．．私ばかり話しちゃって．．私

柴咲 遙っていいいます」彼女が真剣な面もち

で挨拶をする。（柴咲．．遙．．って．．彼女の．．．）

困惑している私の顔を見て彼女が続ける．．．

「はい．．柴咲亜美の娘です．．母から聴いてませんでしたか？」

「確か高校2年の．．．」

「そうです．．．3月に日本に戻ってきて今は大学1年です．．

．．そう言つてまた微笑む．．．

彼女を包んでいる空気もどことなく彼女（すなわち 柴咲亜美）と似ている．．．

（娘さんか．．でも何で．．）そして彼女は小さい声で．．．「

少し 歩きませんか．．．」

と私の顔を覗き込むようにして言った。

「あつ．．ああはい」

私はまだ状況を理解できないまま 彼女の後について歩き出す．．．

（でも．．．なんで．．娘さん．．が？）それを訊けないまま．．

．．いや．．訊くのが怖かったのかも知れない．．．

ふたりは 一言も言葉を交わさぬまま．．．

駅のロータリーを半周して県道303号線と21号線の交差点へ差し掛かる。

彼女は時折空を見上げて．．鶴岡八幡宮の方へゆっくりと歩いていく．．．1年前．．彼女の母親

柴咲 亜美とたどった道．．．

HOTEL鎌倉の先に二の鳥居が見えてくる．．．私は思い切つて声をかける．．．

「あのお．．．」そう言いかけると．．．「堤さんって．．母から聴いていた．．想像していたとおりの方でした．．母は来れないんです．．来れないんです．．．」

消えそうな声でそう言つと小走りで段葛に上がって行つた。

今まさに満開を迎えた桜並木をふたり肩を並べて歩いている．．．
1年前と光景と重なり合う．．．

ただ隣にいるのは．．．彼女ではなく．．．彼女の愛する娘だった。
（来れない．．．）その理由を訊けぬまま．．．彼女はその理由
を告げぬまま．．．

ふたりは しばらく桜並木の下を歩む．．． 白いワンピース．．．
その姿は 彼女と錯覚してしまうほどだった．．． 彼女は時折
桜並木の先の澄み切つた青空を見上げる．．．
こぼれ落ちそうになる 涙を必死にこらえているように見えてなら
なかつた。

三の鳥居をくぐり境内に入っていく．．．

「堤さんは．．．母のこと．．．どう思っていたんですか？」

「．．．」 「ごめんなさい．．．私．．．変なこと訊いちゃつて

「．．．」
「．．．」

「鎌倉に．．．お住まいなんですよね？」

「ああ．．．去年の夏から．．．」

「由比ガ浜．．．よくお散歩するんですか？」

「朝早く．．．と週末はよくね．．．」

「．．．」

「あつ．．．犬．．．秋田犬．．．」

「覚えててくれました？ 先週も．．．」

「ああ．．．あの時の．．．」

「実は 私も 駅でお逢いした時．．．驚いちゃつて．．．」 彼女
はこぼれるような笑顔でこちらを見てそう言つた。

これも彼女が起こしてくれた小さな奇跡なんじゃないかつて．．．
そう 思つた。

「でも．．．『HARU』（はる）あつ．．．犬の名前ですけど．．．
堤さんのこと見るとなんか？」

喜んじやって．．．私が出た時．．．3年前に　うちにやつてきて．．．私が　H A R U K A　だから．．．

H A R U　って．．．母が名づけ親です．．．どうしてだろう？　他の人には　ぜんぜん　なつかないのにな．．．

不思議でしょ？　堤さんに　逢ったこともないのに．．．」

「．．．昔から．．．犬にはよく．．．好かれていたから．．．山形でも飼ってたし．．．秋田犬．．．」

「ええ〜そうなんですかあ．．．なんて名前だったんですか？」

「．．．S O R A．．．だいぶ前に逝ぞつちやつたけど．．．」

「S O R Aか．．．いい名前ですね．．．H A R UとS O R A　．．．」

「そう言つて彼女はまた笑つた．．．

その笑顔は本当に彼女が隣にいるかのようだった．．．

「あつ．．．そのストラップ．．．母からの．．．つけててくださいっただすね．．．」

私のスマートフォンに付いているブルーのエッフェル塔のストラップを見て彼女はうれしそうに言つた。

彼女は．．．私たちのことを何でも知っているようだった．．．「ほら．．．」

そう言つて彼女はバックからスマートフォンを取り出した。

「あつ．．．」彼女のスマートフォンにはピンク色のエッフェル塔が揺れていた．．．

「おそろい．．．ですね．．．」

「ああ．．．」ふたりは顔を見合せて笑つた．．．

舞殿に向かつて　またゆつくりと　歩き始める　．．．

『吉野山　みねのしら雪踏み分けて　いりにし人の　あとぞ悲しき』

「その歌．．．」彼女は少し驚いた顔で私の方を振り向いた．．．

「そう．．．君のお母さんに教えてもらったんだ．．．」

「堤さん．．．本当に母のことを．．．」彼女はうれしそうに　つぶやいた。

舞殿の横を通り抜け．．．彼女は　倒れた大銀杏の前で立ち止まる　．

・

「母も きっと堤さんのこと ．．．大好き ．．．だったと思います ．
．．．」そう言っていてうつぶむいた。

(大好き ．．．だった ．．．？) 彼女の今にも消えそうな声 ．．．
「母は ．．．母は ．．．昨年 亡くなりました ．．．」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6381x/>

HARU と SORA

2011年10月21日11時04分発行